

日本製漢字の変遷と形成方法*

笹原宏之**

Ⅰ 抄 録 Ⅰ

日本製漢字とされるもの実態を解明し、その背景をとらえる研究を進展させるために、その発生と変化の動的な歴史に関して、現存資料から明らかにする。それは、日本製字体(日本製の異体字) や日本製の字音、字義とも関連しながら、奈良時代以前から発生し、時代の変化に即して造られてきたのである。日本製漢字は、造字法(構造) の面からみれば、漢字と異なり会意文字が多いのであるが、それは形声文字との親和性の高い漢語ではなく、和語や外来語といった語種を表記しようとする目的と深く結びついた結果といえる。さらに日本製漢字は、その使用者層などからの分類の視座も加えることで、初めて個々の字が必要に応じて造られ、社会生活を営む人々の間で定着してきた複雑な動態を立体的に把握することができるようになる。今後は、具体的な文字資料の意義を見極めながらそれらを十分かつ慎重に活用し、日中韓の個別的な文字使用の通時的状況と共時的状況とを捕捉し、互いの影響関係を十分に確認していくことが重要である。

【キーワード】 漢字 日本製漢字 韓国製漢字 六書 文献学

Ⅰ 目 次 Ⅰ

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| I. はじめに | III. 日本製漢字の使用層と造字法による分類 |
| II. 日本製漢字の歴史の概要 | IV. おわりに |

I. はじめに

本稿では、日本製漢字(国字) とされるものについて、その発生と史的变化に関して、現存資料から構

* 本稿は、科学研究費補助金課題「現代における和語名詞の表記の実態とその背景に関する調査研究」(基盤研究(C)) の成果を含むものである。

** 早稲田大学 社会科学総合学院 教授 / sasa@waseda.jp

築された歴史をまとめて述べる。日本製漢字に関する従来の研究成果は他の分野に比して多くはないが(笹原2007a)、それらを踏まえつつ、大局的な観点からその動態とそれを生み出す背景とを客観的に把握することを目的とするものである。それに付随して、日本製漢字の位置を明確化するために、日本製字体(日本製の異体字)や日本製の字音、字義を随時参照する。

続けて、それらの使用者層、生成パターンなど、新たな観点からそれらについての分類を行う。それらに具体的な例を示すことによって日本製漢字のもつ主要な傾向を解明する。さらに個々の字に関して判明したことがらについても明らかにする。出自や字源解釈などの認定にまみえられる安易な俗解を引き起こさないために、今後注意すべき点についても述べる。

Ⅱ. 日本製漢字の歴史の概要

日本製漢字の通時的変化に関する体系的な捕捉は、なお見受けられないため(ライマン1990、佐藤1999ほか参照)、本稿で記述を試みる。1世紀に日本は、中国(後漢)から漢字の書かれた金印を受けられ、続いて古代の中国や韓国から渡来した人々や伝来した文献を通して漢字を本格的に移入しはじめた。5、6世紀ころには、日本語(和語)を漢字によって表記し始める。それ以来、漢字は日本列島において、その形・音・義から用法にいたるまで、あらゆる面で日本化を伴いながら、日本語を表記するための文字として変容してきた。

その時には、大和言葉(和語)に対する音読みによる仮借、続けて大和言葉による訓読みが行われた。これらは当時、韓国からの渡来人による影響を強く受けて成立したもので、日本語の単語だけでなく、日本語の文法に従った文章までが漢字だけで、漢文風の変体漢文で表記されるようになっていく。

「京」という字が倉の意としても中国で用いられるようになり、それを受けて韓国ではそれに木偏を付けて、みやこととしての用法と区別をし、「𣏟」を用いた。それが、日本にも影響して、「𣏟」を「くら」と読ませて使うことが起こった(笹原2007a)。現在でも、近畿地方を中心として、その用字が地名や姓に多く残っている。なお、「まら」と読むとされた「𣏟」も日本製漢字とされることがあったが、実際には「閉」の異体字「𣏟・𣏟」の「門」が「𣏟」のように中国北部・韓国で書かれたものと解される(笹原2007a)。

7世紀には、中国ではチャンチンという木や伝説上の霊木を指した「椿」を「ツバキ」と読ませた日本製字義(国訓)が観音寺遺跡出土木簡に現れるが、これは、日本人の風土と感性に即して漢字を改造した早期の行為と見なすことができる。

とりわけ劇的な改変は、漢字の新作である。「𣏟」で武具の「とも」を表す日本製漢字も、やはり木簡や『古事記』に現れている。この「𣏟」は素材を表す「革」と、「とも」の形を象るために選ばれた

と考えられる「丙」とからなる最古層の日本製漢字である。これは、和語の物の名前や名詞、固有名詞を表記するためである。日本では、単音節の漢語ではなく、和語を表記するためには、いわゆる六書では形声文字よりも会意文字が好まれる傾向がある。

奈良時代には、『万葉集』において柿本人麻呂が「嬌嬌」(おとめ)の1字目などの字を個人で造って用いたことが知られている。また、正倉院文書では、「日下」で「くさか」と読む熟字訓をさらに縦に一字にした合字も起こった。こうした仮借や熟字訓は、「本来的、一般的な字音や字訓、字義に従わず」に行われる「語の表記」¹⁾の一つとして位置づけうるものであり、広い意味での「当て字」(笹原2010b)と呼ぶこともできる。

奈良時代の前後には、「鰐」(いかるが 鳥の名)「鯰」(なまず 魚名)「鮑」(あわび 貝の名)のように、古代中国の漢字が、漢籍や仏典などによって伝わってきたと考えられるものも金石文や文書、書籍などに使われている。後代の『和名抄』には『漢語抄』や『本草』など漢籍と思しい資料が引用されている。しかし、それらに現存する種々の資料からの検討を加えると、たとえば「鮑」とその部首を置換した「𪚩」は、出土木簡や史書、随筆など伝来文献などの現存資料に下記のように記録が出現している(詳細は笹原2011参照)。枠囲みは、漢字圏において最古の例があることを示す。

	鮑	𪚩
日本	7世紀	8世紀
韓国	10世紀	8世紀
中国	7世紀	14世紀

中国では古い記録を失ったため、日本製漢字のように見えるが、中国製であるため日本製漢字ではなく、「佚存文字」として区別すべきものである。「畠」(はたけ)も、その可能性がある。「畚」の日本への伝来は古く、8世紀の正倉院宝物に記された例が確認できる(笹原2007a)。

中国	田(水田・白田・火田)
韓国	畚 田
日本	田 畠 火田・畑

8世紀の奈良時代には、漢字の「樞」(キョウ 材料となる木)を「檜」(かし)、漢字の「鵠」(イツ)を「鳴」(しぎ)と、日本人が和語で理解しやすく、またイメージも豊かに表現できるように改造した日本製漢字も金石文や『万葉集』などに現れ、漢字から日本製漢字へと交替していく。

1) 笹原宏之、『当て字・当て読み 漢字表現辞典』, 東京: 三省堂, 2010b, pp.892参照。

主として固有名詞の表記に用いられる「俣」(また) は漢字「俟」(まつ) を変形させたものと考えられるが、「矢」を「天」のようにした異体字や、別の字の異体字としては中国にもすでにあった(字体のみが衝突した例、あるいは応用を加えた例といえる)。現存する『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』には、異体字で記されているが、正倉院文書など当時の肉筆ではすでに「俣」と記されており、転写の誤りにすぎなかった。

こうした現象は、漢字が日本化していく過程といえる。万葉仮名で「伊和之」などと記されていた魚名は、平城京木簡に出現する「鰺(いわし)」のように、意味が対応する漢字が見つげにくい物にも日本製漢字が造られていく。他の魚名の表記との対称性が求められたことも一因と考えられる。日本独自の神事に用いる「さかき」という木の名も「賢木」などから「榊」「木祀」へと日本製漢字が生み出される(下記の「小学篇」に収められている)。地方の役人が造ったと思われる地域独自の日本製漢字も、すでに各地の『風土記』に見られる。変体漢文、万葉仮名交じりの文や、漢詩文という漢文体でも音読みだけでなく、訓読みを前提として使用されるようになった。

こういった日本製漢字を集めた「小学篇」という辞書も編纂されていたことが、後代の『新撰字鏡』にうかがえる。奈良時代においては、日本製漢字はすでに数百字にまで増加していた。金石文や文献、文書などさまざまな資料にそれが現れている。

ここまでに出てきた字を中心として、用法別に出自などを分類を試みると下記のようにまとめることができる。魚偏など、種々の部首においても、同様に6通りの分類が可能となる。

〈表 1〉漢字・日本製漢字の用法別の出自などの分類

例字	音訓	類別	属性
木	「ボク・モク」 「き」	漢字 漢字義	音読み (象形文字) 訓読み
椿	「チュン・チン」	漢字 漢字義	音読み (形声文字) 霊木・チャンチン
榊	「つばき」 「さかき」	日本製字義 日本製漢字	訓読み (会意文字) 訓読み (会意文字)
魚	「ギョ」 「うお・さかな」	漢字 漢字義	音読み (象形文字) 訓読み
鮎	「ネン・デン」	漢字 漢字義	音読み (形声文字) なまず
鰺	「あゆ」 「いわし」	日本製字義 日本製漢字	訓読み (会意文字) 訓読み (会意文字)

8世紀末の平安時代以降、さまざまな文化が日本風に発展する。表音文字である平仮名(ひらがな)と片仮名(カタカナ)が漢字から派生し、インドの梵字の影響を受けて、それらによる五十音図も形成される。仮名は簡易であるために庶民に広まっていくのだが、あくまでも「仮名」であり、「真名」つまり本当の文字であると認識された漢字の方がより価値がある、格が高いという意識が強く残っていく。

空海の筆跡には「円」(圓)のような日本独特の異体字も現れ始め(笹原2006)、貴族の詠む和歌などに使われる「匂」(におい・動詞は「におう」)は、「韻」の異体字の一つ「勻」が定着したもので、漢字のもっていた意味が限定され、かつ音読み「イン」を失い、日本製漢字らしさを増していく。『江談抄』における「畠」は日本製漢字ではないという言及など、日本製漢字に対する意識も萌芽し、研究も始まっている。同書には渤海国の使者の名前の造字「𪛗」(どぶり)「𪛘」(ざぶり)も見られる(後に『節用集』などにも登録される)。これらは実際には日本製漢字であろうが、異国の造字を扱う点と後代への影響(井)という点で重要である。

さらに、名詞は漢字で書きたい、単語(概念)は漢字一字で書きたいという日本人の知識層の意識が、日本製漢字を生み出し、使っていくための原動力となる。当時、漢字を造りだす層は概して漢籍の素養があり、「辻」(つじ)は中国の「十字街」(『北史』など)を、「柊」(さかき)は、中国での「蚕」の俗字「𧈧」を踏まえたものと思われる。「𪛙」(まろぶ、後に「すべる」)「木佛」(しきみ)「𪛚」(おもかげ)も、仏教説話集である『今昔物語集』に登場する。

このように11世紀後半からの院政期における新興漢字の萌芽を経て、12世紀末からの鎌倉時代以降、武家が政権を握る中世の時代となり、漢字の使用層が広がっていくことにより、公家や僧侶だけでなく、武士、連歌師など新しい時代の新興の文芸家、職人など社会集団ごとに、造字が広く行われるようになっていく。

武器の「槍」(やり 鎗)には「鎗」という訓読み(遣：やり)を利用した日本製漢字が現れる。「畑」(はた)は、鎌倉時代に、焼き畑農業の進展とともに登場し、次第に「畠」(はたけ)との区別を失って混用されていくようになる。「働」は、前述のとおり「はたらく」が「動」と書かれていたことを踏まえて、やはり中世に「にんべん」が付加されたものであり(後述する)、『平家物語』などの軍記物では相次ぐ合戦での功績を表していた。

14世紀からの室町時代には、魚名の「タラ」には公家日記などに「鱈」が現れ、また、礼儀を身に付けさせることを意味する「しつけ」には礼法書などに「躰」と「身花」とが現れる。山道の最も高いところは、日本では道祖神が置かれ、境界となる特別な地であった。日本製漢字の「峠」(とうげ)は、「嶺」とは異なる概念の語であり、「峠」は中国の「弄」の俗字「𪛛」を踏まえつつ、日本独自の概念を「山」「上下」と絵画的に表したものと見え、この時代に諸書に登場する。「畑」や「峠」のように、自然にかかわる会意の造字が目立つのは、概して日本人が花鳥風月や雪月花などの自然の風物に寄せて情緒やイメージを尊重する傾向をもつことと関わる可能性がある。『下学集』や『節用集』などの通俗性を

帯びた辞書では、それまでの『和名抄』などの「俗」に変わって、より限定的で厳密性をもつ「倭字」という出自を示す術語が現れる。

重さの単位の「匁」(もんめ)は、中国で生じた「錢」の俗字が日本において変形し、訓読み(モンは字音由来であるが)の字として定着していく。地名にも造字が各地に現れ始める。京都では「榊辻」(なぎつじ)という地域独自の「榊」という会意の日本製漢字も造られた。これは、日本製漢字だけの地名である。なお、ベトナムのチュノムにも「ビンチュ省」のチュに「榊」(tre 竹)があるが、暗合したものと考えられる(暗合については後述する)。

室町時代から江戸時代に入る前辺りに、「笹」が植物名や地名などの「ささ」として、文書、文芸作品などに現れる。筆者の名字は江戸時代の富山における屋号からである。この字は、「竹」と「葉」からできたと考えられている。古くは「ささ」は「小竹」「篠」(しのとも)が多く、「筴」という「篠」の声符を置換したか会意化によるものも中世期にあった。なお、中国の金文にも見られる字体であるが、それは「世」としての使用であり、かつ後代には絶えていることから、日中で別個に造られた文字が、たまたま形だけ一致したものである。こうしたものは字義まで一致する暗合ではなく、衝突と呼ぶ(後述する。笹原2007a参照)。

なお、このころには漢方医による暗号のような造字「一字銘」も集団文字として出現する。また外に向かつては、漢字圏で互いに用いられている字種や用法が異なる現象への言及が多く現れている。

17世紀からの江戸時代には、中国の熟語「鳳(風)巾」から「鳳」(たこ)という日本製漢字も造られる。日本独自の文化である戯作、日本刀、日本酒に関する日本製漢字もこの時期に増えていく。歌舞伎や浄瑠璃でも、外題に縁起を担いだ会意の造字、合字を多用した。このように、識字層の拡大に伴って一般の人々の間で、遊び道具までが日本製漢字で表現されたのである。日本製漢字は、表記面だけではなく、人々が使用する語句への影響も生み出すことがあり、「鱈」(タラ)を字体から「旁(つくり)の雪」と異名で称するような現象も生じた。さらに、一般向けに見て楽しむだけの遊戯性、一回性の高い嘘字、鈍字のたぐいも量産された。

こうした中で、日本製漢字研究も進展を見せ、新井白石が『同文通考』において、初めて「国字」「国訓」という術語を日本製の漢字や日本化した字義に対して設けた。日本の古書を研究する国学者たちは、木村正辞が、奈良時代の文献に発見した日本製漢字「櫨」(つき 槻)などを自己の号に復活させるなど、日本製漢字の死字も再利用した。これまで、漢籍にある漢字を重視してきた漢学者も、林述斎が隅田川を表すために造った「墨」のように、日本製漢字を雅称のために作製するに至った。この場面では、音読みをもつ日本製漢字が俗から雅に転じたのである。思想家の安藤昌益や蘭方医の海上随鴟のように、自己が必要とする表現のために、日本製漢字(個人文字)を一人で数百字造る人たちも現れる。

当時の封建的な身分制社会の中で、敬称の「様」(さま)を相手との関係によって「様」「様」と書き分けるような待遇表現が表れる。日本製字義に日本製異体字を掛け合わせ、目上・目下の区別がその

場その場の筆記機会に行われた。なお、その身分による表記の区別には、別のレベルのものでは書体やひらがなも利用された。

熟字訓として用いられるための日本製漢字も現れた。「はしたなし」を「𪛗𪛗」と記す類である。これらは、通俗的な文芸に見られる世話字と呼ばれる一群の文字に属した。この時期には、日本製漢字で表記される語は、あらゆる品詞に及んでいる。一般に助詞にも「鳧」「鴨」などの漢字が当てられることは、上代以来途切れてはいなかった。日本製漢字が表す語(読み)を品詞ごとに分類すると、下記のようにほぼすべてが該当するが、名詞と動詞がほとんどを占めている。

〈表 2〉品詞と日本製漢字の例

名詞	𪛗	はた・はたけ
固有名詞	𪛗	なぎ(草𪛗) 𪛗 あくつ
動詞	働	はたら(く) 込 こ(む)
形容詞	𪛗	やさ(し)
副詞	𪛗	しか(と)
接続詞	𪛗	さて
感動詞	𪛗	あっぱれ(「あはれ」から分化し、「哀れ」などと用法も区別された)
助詞	𪛗	とて(とてもという副詞としても使用された)
助動詞	𪛗	ます △(ム) ござ(る)

中世以降、「𪛗」(ビョウ)のような形声文字も造り出されている(後述する)。「勢」も左上が「生」と日本語としての音読み「セイ」を示すような崩し字を介した日本的な楷書の字体が好まれていた。西洋のオランダ医学からの影響を受け、漢方の五臓六腑説にはなかった人体のklierに対して「腺」という字が造られた。また、既にあった「働」も、旁から形声文字の方法を応用して「ドウ」と読まれるようにもなり、「労働」「実働」「稼働」といった和製漢語を形成し始める(「𪛗」と略記されるようにもなる)。こうした日本製漢字は、近代に中国や韓国、ベトナムにも伝播し、一部が定着をみた。

和服の「つま」には、「妻」という字の訓読み(主に発音のみ)を利用し、衣偏を加えて「褻」を造る、というような応用も行われる。「𪛗」で「かみしも」(武士の礼服)は、「上下」、さらに「𪛗上𪛗下」を経て生まれた合字である。さらに皮膚病を意味する「はたけ」には日本製漢字「𪛗」に「やまいだれ」を付けるものまで雑俳書に現れる。日本製漢字を利用した新たな日本製漢字といえる。そして、鎖国体制の中で、北海道、青森から九州、沖縄まで、各地で姓名や地名や方言を表すための日本製漢字、日本製字義が生み出された。

こうして、江戸時代までに、日本製漢字は数千種類生み出された。主な日本製漢字に関する研究書も編纂される。韓国での日本製漢字(たとえば新井白石の書簡に出る「𠩺典」)や日本製字義に対する言及も起こっている。

19世紀後半、明治時代に入ると、活版印刷と普通教育が普及し、日本製漢字の生産は激減する。戯作の流れを汲む尾崎紅葉は「□(泉の下に𠩺)」(ゆ 温泉の意)などを作品で造って使った。キロメートルに「𠩺」、ミリリットルに「𠩺」といった日本製漢字も生産され、漢字圏に普及した。近代の国語国字問題の議論がわき起こる中で、国字(ここでは日本で日常用いる文字の意)を改良しようと、新たな字も提言されたが、実用からは遠いものばかりで普及することはなかった。

人力車の発明を受けて「𠩺(くるま)」という日本製漢字も造られた。新聞での造字の懸賞によって選ばれたもので、募集に対する創作漢字として、実際に定着した唯一のものである。

また、姓名にも造字が増え、「十」の縦線をはねて「もぎき」と読ませる姓も現れる。象形文字、指事文字とよべる数少ないものである。名字(姓)では、本家と分家で異体字を使い分けるような細かな表現も増える。

ここで、日本製漢字が表す語の語種も出揃った。和語は多数で、数千種にのぼると考えられる。次に例を示す。下線部分が日本製漢字。が「/」より左が常用漢字表内字。

和語	畑 働く 込む / 辻 鯛
漢語	𠩺(漢字の「𠩺」の音読みのワクが語源) / 炬燵 饅飩 澆瀾 鉾・鮫鯨(語源説に複数あり)
外来語	なし / 𠩺(タバコ) 𠩺 金土金丹(トタン) 𠩺力(ブリキ)

日本製異体字も新たに生み出された。「𠩺」は文書の中で「𠩺」と略されるようになり(山下2012)²⁾、ガリ版(孔版)の普及の中で、社会活動家などの間で「機」を「木キ」、「議」を「言ギ」と略するような字体も使われていく。

戦後には、遊びで造られた「感字」である「□(女の右に𠩺)」(エレベーターガール)が有名となるなど、使用されるには至らないまでも、感字の中にもある程度一般に知れ渡るものも現れた。

ただ、活字印刷や近代辞書の刊行、漢字政策、近代教育、そしてパソコンなどの普及と徹底によって、次第に造字行為は減少していく。漢字自体が減少していき、平仮名、片仮名やローマ字の使用も増える中で、2010年に改定された「常用漢字表」では、「𠩺」(臭いも採用)「𠩺」(県名表記として)のほか、「𠩺」が採用された。この字が個人によって造られてから200年で、使用層を拡大し、ついに共通の字として認められたのである。

2) 山下真理, 「𠩺」の字体について: - 略字体の出現時期とその要因 -

(http://www.kanken.or.jp/incentive_award/pdf/22/yamashita.pdf 2010 日本漢字能力検定協会 2012/08/23確認) に、出現状況が詳しく追跡されている。

Ⅲ. 日本製漢字の使用層と造字法による分類

1. 使用者層による分類

文字は、辞書に一覧的に登録されたものだけを見ていては、それらがなぜそこにあるのかを捉えることにはつながらない。静態としての記録は、構造や体系、それらを支える規範意識を知るためには重要であるが、上述したような動態として史的变化の原因にまで迫ろうとするならば、その使用者の社会的な層にまで目を向ける必要がある。

文字は、一般に使用者層から、下記のように分類することができるであろう。

共通文字：漢字政策である常用漢字表・人名用漢字表など。

地域文字：特定の地域において使用される文字。

集団文字：特定の社会集団において使用される文字。

個人文字：特定の個人によって使用される文字。

場面文字：特定の場面・環境において使用される文字。

そしてこの分類は、文字の出自と掛け合わせることが可能である。これを用いることによって初めて日本製漢字の定着や廃絶に至った史的過程を正確に把握することができるようになる。例えば「腺」という字田川榛斎が造って一人で用いていた日本製漢字が、いかにして広まったかという動態を捕捉することが可能となる。

まず、日本製漢字の地域文字には、次のようなものが存在している。奈良時代においてすでに『風土記』の産物の諸字には、中央だけでなく、地方でもすでに造字が行われていたと思われるケースが見受けられる。

- 杵 いり 愛知県など尾張地方で、普通名詞、姓、地名として使用されている。会意だが、字訓も利用しており、形声的でもある(笹原2003)。
- 注 めた 高知県の小地名に複数見られる会意文字である。
- 屾 たお 中国地方辺の小地名に複数見られる象形文字的な要素を含む字である。中国でも「蓋」の異体字として字書に載ってはいるが、衝突であろう。日本は複雑な地形が豊富にあるため、こうした語や地域文字は多数採取することができる。
- 岍 あけん 滋賀県に「岍原」(あけんばら)という小地名が存在する。「あけび」の転で、熟字訓「山女」の合字である(笹原2006)。

次に集団文字は、位相文字の一つである。位相は、集団のほか、場面を表すことも可能であり、位

相文字といえは場面文字も含む。

嫗 嶺 うば くら 中世以降の立山信仰で「うば堂(どう)」「岩くら」などの宗教施設や土地の名前に用いる。越中(富山)における宗教であり、地域文字性も帯びている。ほかにも修験道、富士講など新興宗教には造字が見られ、ときに呪符も造られた。

𠂔 かな 刀 中世期の刀工など職人集団による集団文字・場面文字(位相文字・暗号)で、近世初期まで用いられた。

さらにこれには、歴史性、政治性、個々の場面性も加味する必要がある。地方的な日本製漢字が時代とともに一般化、中央化するもあるので、そうした歴史的な変化を社会、文化的背景と合わせて「字誌」として具体的かつ立体的に記述していく必要がある。

日本人のことばだけでなく、社会(識字層)、文化、生活や意識の変化に応じて、さらに「辻」「柵」「柵(樺、もみじ)」「働」「峠」「鱈」「躰」「袷」「腺」「俚」「糰(センチメートル)」「火石(セキ)」「才筆(むしる)」「𠂔(トン 重量)」「日玉(曜)など種々の造字、既存の漢字に対して字体、用法に改造を加えた字が、時には形声文字や象形文字などの方法を交えながら、明治大正の時代まで行われてきたと見ることができるのである。

柵 「樺(かば・カ)の異体字としての使用頻度が姓など固有名詞で高いために、人名用漢字に採用され、さらに古来の「もみじ」や、新たな訓「はな」なども当て読みで出現した。

𠂔 そり 東北地方の地名で使用され、パソコンで使えるJIS第2水準漢字となって、仮名漢字変換が可能となり、それを利用してついに普通名詞にも使用されるようになった。JISは使用字種の制約を生み出す一方で、枠内に入った既存の日本製漢字には、新たな生命を吹き込んだ、と位置づけることができる。

エビと読む「𧈧」は、もとは旁が「耆」であったなど時代による字体の変化が認められ、東北地方で多用されるなど地域による使用度の差をもっていた。しかし、近年、蛸原友里という人気モデルの性に含まれていたために、メディアを媒介とした社会集団による認知の差を生み出した(笹原2007b、笹原2007c)。北海道では、普通名詞として使用されているが、現地でも地域差があるとは全く意識されていない。この使用の偏在は、姓や地名での使用のほか、「蝦夷」での「𧈧」字へのなじみと回避によるものであろう。今日でも、こうした動きは発生しているのであり、過去の歴史だけを考察しては、日本製漢字にかかわる現象を相対的に理解することができない。

一方、漢字・日本製漢字の音訓を利用した仮借や字義を利用した当て字は、アイヌ語に対しても及ぼされる。当て字は、日本製漢字の新作が減った今に至るまで、日本人の感性を表現する手段として新たに生産されつづけているのである。日本製漢字の多様性を立体的に捕捉するためには、こうした位相を多角的に見当することが必要である。

2. 造字法による分類

以上の歴史に現れた日本製漢字には、ここまでにも随時触れてきたように、形成方法のパターンが見いだせる。上記の変容の動態を個々の字の移ろいから認識するためには、構造面に着目して検討を加える必要があろう。

その構造は造字法として解することができ、六書では部首と義符とを組成した会意文字が圧倒的に多い。それは、文字と言語の点から見れば、漢語(字音語)ではなく、固有語すなわち和語を訓読みによって表そうとするためである。先に述べた「鳴」(しぎ)や「檜」(かし)は、その典型である。人間の認知や心理の面からは、既存の漢字を認識していても、それより日本人が理解しやすい構成要素と構成法を選択し、造りかえたともいえる。

会意だけではなく、早くから合字という造字法も生じている。人名に見られる「麻呂」は、奈良時代のうちに縦書きの筆字において合字化が始まり、1.5字ほど長さをもつ状態を経て、「麿」へと一字化したのは、土台となる漢字「磨」などがあることに加え、同源の語を訓とした「丸」などからの類推もあって、一つの概念は一つの字で書きたいという表語文字としての要求によるものであろう(笹原2006)。「畑」「畠」なども同様に捉えることが可能である。

日本製漢字においては、象形文字の数が少ない。

☐ ます 栢・栢(升・舛)は形声(偏を付加し、旁で訓を示す)による

日本製漢字。江戸時代から記号的な形態をもつ。

☐ トショ(図書)これは図書館学の秋岡梧郎の造字であり、「図」(図書館)などと造られた。これに視線の動きを加えた「口(口の中にノ ドクショ(読書))」は指事文字といえようか。

構成要素に既存の漢字を象形的に見立てて転用したものは、古くからいくつか見られる。部首と構成されると会意文字として扱われるのが一般的である。

𡵓 とも 奈良時代以前から現れる最古級の日本製漢字で旁が象形的要素ともいわれる。

辻 つじ 「十」が象形的。漢語の「十字路」を元に作られたものである。

𡵓 まろぶ・すべる「𡵓」(おしたつ)もあり、この「一」は象形文字ないし指事文字ともいえよう。

この「一」を「二」「三」「四」「五」「六」「七」「八」「九」とする造字もかつて辞書類に収められていた。

𡵓 たわ 旁が山の鞍部を表し、美作辺りの小地名に見られる。同類に奈良に「𡵓」、静岡に「山乙」などもあり、やはり旁の「𡵓」や「乙」が象形としてとらえうる。

𡵓 するめ 日本製字義であるが、旁が象形的要素ともいわれる。

なお、「魚◎」で「ちくわ」(竹輪)と読ませるものは、造字と遊びの字との境目が明確ではない。魚偏

で学習するために、明朝体の影響を受ける人が多く、教科書体で習得されることの多い「入」とは、右はらの始筆位置に字体に揺れが生じる。鎌倉時代ころは「こもる」などと読まれた。「𠂔」(まろぶ すべる) は前述参照。

峠 どうげ この語は、民俗学などで、「手向け」の転とする。現在、この字が好きだと評する人が極めて多い。字にイメージを託し、好悪の感情を抱くのも日本人に顕著な現象である。遅れて現れた「𠂔(糸の右に𠂔)」「𠂔(しどろもどろ)」には、「峠」や「𠂔(こはぜ)」などと同様の発想がうかがえる。「𠂔(彡の右に山とその下に𠂔)」「𠂔(どんど)」は、福井で用水路を意味する方言から生じた小地名に見られる(笹原2006)。

𠂔 (佛を3つ品のように) さかし まこと これらは、昨年、一昨年、二年前などを意味する「𠂔(𠂔に佛)」「(こそ たまたま)」「𠂔(𠂔に法)」「(おとし)」「𠂔(𠂔に僧)」「(さおとし)」とともに中世の字書に収められるが、仏教に関わる者による造字であろう。

鰯 たら 比喻による「ゆき」という女性語から生じたものであろう。四季、雪月花の風流の嗜好や島国の食文化を反映している。なお、「𠂔」「𠂔(そり)」は、熟字訓「雪車」「雪舟」から生じた合字と捉えうる。

樺 もみじ 中国製の漢字には「雪」や「花」を構成要素とするものはほとんどない。日本人が花鳥風月、雪月花を鑑賞し、自然の植物を尊ぶ文芸が享受される中で生じたものであり、日本的な字といえる。ただし、「月」は造字の構成要素に利用されることが少ない。「樺」の日本製異体字としては「カ」「かば」として使われる(上述)。なお、「口花(カ)」は、「喧嘩」の2字目に使用された日本製異体字。「火事と喧嘩は江戸の華(花)」という俗諺とその発想に共通性が感じられよう。「言花」とも書いたが、その字の場合は「やさしい」としても用いられた。なお、現在の日本では「優しい」は「人を憂える」「憂う人」と俗解されることが多い。形声を会意化して捉えようとするのであり、日本製漢字に託された感性は受け継がれている。さらに近年、姓名判断の画数占いによって「憂」を用いるケースも増えてきている。造字自体は文字コードの影響からも減少しているが、既存の漢字の字義を無視して、感覚的にイメージとしてとらえる傾向の高まりが随所に生じていることが注目される。

糒 こうじ 「麴」を素材・イメージに適合させ、ニュアンスを付与したものである。いずれも常用漢字表外字だが、使用し続けており、用法を細分化している。近年、健康食品として注目されるようになり、この日本製漢字も使用頻度が再び高まっている。

嬖 かかあ 熟字訓「口鼻」「鼻口」から日本製字義で「口鼻」となった。そこには「𠂔(かぐ)」も影響した可能性がある。そこから部首を女に換えた江戸時代の造字である。

𠂔 しつけ 日本独自の生活規範を表す語に対して中世に出現。しかし、戦後に死字が進み、個々人に当て読みで「エステ」「ニクタイビ(肉体美)」などと臨時的、遊戯的に読まれる状況に至っ

- た。前述のとおり室町時代から江戸時代ころには、他の会意による「身花」などとも書かれた。
- 漣 しめ「メ」と同義。文明本『節用集』に採録され、現在、壱岐などの小地名や姓、酒の銘柄に残る(笹原2006)。この「ミ」は、進む意を表すのであろう。「鮪」は「櫛」が、「櫛」は漢字「𩺰」(蠶(蚕)に対する六朝時代の異体字)がヒントとなったものであろう。
- 蝮 えび 和語の発想に従った熟字訓による表記「海老」を踏まえたものであろう(上述参照)。近世には「蛭」を派生した。
- 樺 で一ご 木の名。沖縄(琉球)の姓にかつてあった。「𩺰」(ぐし)は、沖縄の地名と姓に「𩺰宮城」(ぐしみやぐすく・ぐしみやぎ)として使われているが、漢字の「隹隹」の部分が「双」と略されたものではないかともいわれる。
- 唎 いかん おとな うば いずれも日本製字義で、北海道、佐賀、山口と各地で小地名に地域訓として出現する。ほとんど使われることのない漢字と衝突したものである。会意式の発想によるほか、地名「姥喰」(おばくら)の「姥」が逆行同化を起こした。
- 凧 こがらし 部分的な形声文字か。「風」が元になっているが、「木嵐」に基づくか。「木枯らし」では、時代劇の木枯紋次郎のイメージが付くとして、使用を避け、「凧」を選んで用いるという人もいる。日本では、文字による表記感、語のコノテーションと同様に重視されてきたのである。なお、「凧」(たこ)は、中国系の熟語「鳳巾」「風巾」からと考えると略字化を含む合字となる。漢字では「紙鳶」とも書く。関西で「いか」、九州で「はた」とも、地域訓で読まれる。
- 凰 ふぶき 連歌作品のほかに、秋田藩の文書に出現していた。
- 笹 ささ「竹葉」の略字を含む合字からか(上述参照)。

形声文字は、本来は中国語を表記するための方法であり、単音節的ではない性質を持つ和語には適さないものであった。

- 働 ドウ もとは、和語「はたらく」を「動く」と表記し、「うごく」と区別するための造字であったが(乾2003)、後に類推により音読みが生じた。「労働」「実働」などの日本製熟語(和製漢語)におけるドウは慣用音と位置づけられる。
- 鋌 ビョウ 漢語起源とされる武具などの部品のために近世に生じたものである。
- 腺 セン 蘭学者の宇田川榛斎による訳語のための造字であった。江戸時代の内に医師の集団文字となり、明治期には一般化が進んだ。2010年に常用漢字表に採用され、ついに共通の文字となった。個人文字の段階では、漢方医などライバルたちの造字と競合し、書籍などを通じて結果的に広まったものである(笹原2007a) 3)。
- 墨 ボク 墨 隅田川(墨田川)のためだけに造られた造字(笹原2007a)3)。既存の「墨水」などの「墨」

3) 笹原宏之、『国字の位相と展開』、東京：三省堂、2007a、pp.611-694に字誌が記されている。

に対する偏の付加である。雅を目指し、造字だが中国での「漢」「湘」などの三水の形声文字という川の名の伝統に則る。この雅を字に求める意識にも、日本人の漢字へのイメージ重視の姿勢がみられよう。林述斎が造字した個人文字から発し、明治初期の成島柳北から昭和の滝田ゆうに至るまで江戸情緒、下町の雰囲気を受け継いできた字であった。三水の日本製漢字は庶民のまでは少ない。

- 鯉 きす 魚名の頭音を旁で表現したものである。日本製漢字には、こうした魚偏の造字が多く数百種にのぼり、木偏の次に多いと考えられる(菅原1990にもその傾向が現れている)。キスという魚の口が突き出ているために、英語のkissによる造字ということもあるが、この外来語の伝来が江戸時代であることと合わないため、俗解にすぎない。このキスは和語である。
- 鯨 鯨 ふぐ 和語のフグに当てるのは日本製字義である。漢字では「鯨」「魚屯」「河豚」などと表記される。2字目には、同音・類音の福(ふく)からの連想も考えられる。「魚豕」は日本製漢字。江戸時代には、書簡に記された「鯨」を漢字義「あわび」、日本製字義「ふぐ」と、漢方医と患者とが互いに誤解して死亡事故も起きたとされる(滝沢馬琴『燕石雜志』など)。
- 広 コウ・ひろい 上述のとおり漢字「廣」の日本製異体字である。この音義をもつ字は「宏」「弘」など「ム」を含むため、そこから類推されて造られたとも考えられている。「職」の略字にも「耳云(漢字と衝突する)のほかに「耳ム」がある。中国の「又」よりも日本では「𠂔」を含め、この形が略字には好まれた。日本製異体字である。中国由来の「仏(佛)の影響もあろうか。
- 褌 つま 和服(着物)の部分の「つま」であり、この旁が訓読みを示す。形成の方法によって、和語の全形を表記する方法である。
- 袷 かみしも「上下」>「衣上服下」がさらに「𦑔」の先例に即して合字化したものであることがすでに知られている。
- 酛 もと 会意形声式といえる。日本酒の酒母の意であり、江戸時代には旁が「胎」とも書かれた。このような細々とした物にも筆記の必要性があれば命名と造字がなされた。
- 沝 なぎ「なぎ」という訓をすでに持っていた「和」に偏を付加したもので、同訓の「風」も異系統の日本製漢字である。「木和」も「なぎ」と読むが木の名であり、中世の真名本に出現する。「那木」の合字としての「𣏟」(日本製字義)や「𣏟」(日本製漢字)とも関連するものであろう。
- 枳 とち 十(と)×千(ち)=万という発想によると考えられ、平安時代から鎌倉時代初期にかけての造字である(後述)。
- 俵 くるま「車」への偏の付加により字義の区別が示されたものであり(前述)、音読みでシャ(俵夫シャブ)・ジンリキシャ(人力車)とも読むことがある。
- 囿 「図書館」の略字で、筆記経済によりカタカナを含めた合字的な集団文字である(上述)。「囿」は中国製である(笹原2007a)。

𪛗 慶應(義塾大学) で生じた「𪛗」の合字化である。ローマ字を声符のように用いたものであって、遊戯的であるが、筆記経済に叶っており、1930年代から存在が確認されている。

上記の造字法が複合した日本製漢字も存在している。

𪛗 キロメートル「米」はもと「米突」という音訳であり、「メートル」の頭音を示す(次第に意味をも示すようになる)。これらは、会意と形声といえる可能性がある。これらは、幕末からあるとされることがあったが、実際には幕末の音訳をふまえて、明治期に中央気象台がスペースを節約するために造りだしたものであった(笹原2007a)。「𪛗」(センチメートル)「𪛗」(ミリメートル)も今でもしばしば用いられている。

𪛗 キログラム 上と同様に、「瓦」でグラムを表す系統も音義+義で構成されている。「𪛗」(ミリグラム) はかつてはよく用いられた。

𪛗 ヘクトリットル「立」でリットルを表す。

𪛗 トン・グラムトン「瓦」が「瓦蘭馬」でガランマの音訳という表音に端を発するものだが、そこからこの造字が生じ、形声文字のように「トン」とだけ読むようになったため表意文字的な要素ようになった。グラムトンと読むばあいもあり、そこでは再度、表音に変わったものといえる。現在でも東京モノレール車内などで見かけるものであるが、常用漢字表から除外されており、トンを表記する文字としては、「屯」「t」が主流となった。他のメートル法の単位も同様に「米」「立」のほかは、片仮名表記か「m」「l(筆記体)」「km」「mg」など記号表記となっている。

熟字訓を伴う既存の漢字列を組み合わせた合字としては、「𪛗」「𪛗」が代表的であるが、それは先に「白田」「火田」で「はたけ」「はた」が熟字訓として存在、定着していたことが条件となる。これまでも、合字に該当しうる例を示してきたが、下記は純然たる合字である。

𪛗 麻呂 一語は一字で表記しようとする中国の漢字に端を発する意識によるものだろう。筆字で縦書きされたことも合字化を促進した。「磨」が下敷きであろう。この「まろ」は、まる(糞の意)か丸の意とされる。人名などに用いられる。

𪛗 久米「横条」「条子」など姓名に使用される。「斎」の異体字「条」の存在が下敷きになったものだろう。

𪛗 刀(かたな) を表すための戦国時代における刀工や鑑定師の間の集団文字(他集団への秘匿のためというばあいには場面性も伴う。前述参照)。

漢字が形態面で転化を来したために、日本製漢字と捉えられてきたケースも少なくない。

- 霨 おかみ・め いずれも靈(靈)の巫を意図的に置換したと考えられる日本製字義で、『日本書紀』など上代の文献などに用いられている。いずれも和語を表すためのものであり、字音リョウ・レイを喪失した。
- 枳 とち 日本製漢字の「枳」(十と×千ち=万)と、漢字の「櫪」(レイ)とが混じて生じたと吉田東伍『大日本地名辞書』のほか、三矢1932、中田1982などによって考えられた日本製漢字である。明治の廃藩置県で枳木県ができた時から多用されるようになった。「帰枳」で、類推からキレイと読む類は、地域音に分類できる。
- 攀 たすき 会意による日本製漢字とされてきたが、漢字「攀」が平安時代には日本で会意化を起こしてこのように変わっており、字音ハンを喪失したものとみられる。
- 匂 におい・におう 漢字「匂」(韵)の変形である(上述参照)。字音インを喪失、聴覚・視覚的な意味を削り、嗅覚が中心的な意味となっていく。
- 柶 わく 漢字「木卒」が略されたもので、江戸時代の集団文字に端を発した。常用漢字表では訓読みとsて扱われているが、ワクは字音語である。
- 蟻 だに 会意による日本製漢字とされてきたが、漢字「蟻」から変化したもので、字音はゼイからマンに転化し、後に喪失した(中国でman3となる。笹原2007a)。
- 笔 むしる 漢字「笔」から変化したものではなかろうか。後に部首が加わり、「才劣」「才笔」とも書かれる。
- べ しめ 中国の亀甲の割れ目の象形文字「卜」(占)を日本で「しめ」として用いたことからであろう(中世以前の確実な用例は見つかっていない)。「貫」の略字や封じ目としての使用は別に系統を考える必要がある。なお、繰り返しに用いられる「々」は、中国産の反復記号「=」が日本で変形した日本製符号である。「一ヶ月」などに用いられる「ヶ」は、漢字「个」から生じた日本製異体字である。
- 匁 もんめ 近世以来、「文メ」合字説もあったが、俗解である。字義と文献から立証される「銭・泉」由來說よりももっともらしいものと意識され、流布した(笹原2007a)。
- 旗 はた・キ 辞書では日本製漢字とされることが多いが、「旗」に字源俗解、誤った楷書への回帰により、種々の途中段階を経て発生したものである。結果的には部首の付加となっている。中国でもかつて同様の字体が使用されており、暗合を起こしていた。「靄」「靄」も、「鶴」の崩し字を介して次第に変化したものであり、姓名などに残っている(笹原2007a)。
- 様 敬称の「様」(さま)について、近世に手紙などで目下への宛名における待遇表現として使用されたもので、日本製字義に定着した異体字であった。ほかにも「水」の部分「次」に置き換えた「次様」と呼ばれる字体なども用いられた。現在では、これが常用漢字表における新字体となったのは、社会制度が変化したことを反映している。伝統芸能である三味線の世界には、

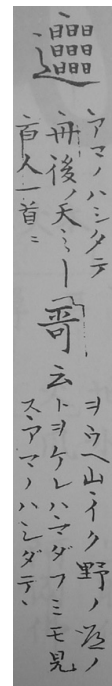
類似のケースが残っており、その格によって「澤」の崩し字、「沢」(しゃくざわ) と格下になっていく。正式な画数の多い自体ほど敬意が表出されるという意識による使用である。

斎 姓の斎藤などの「齋」は、「示」の部分の「丨」までしか書かないもの、「ノ」まで書くものなどもあり、日本製異体字も多数存在する。「齊」との混淆のほか、過去の筆記者の書き癖や、本家と分家との区別のためとも考えられ、細分化した字体に対する意義付けも確認できる。「□(文の下に二)」のように、文武の武を一とし、文は二とするためという謂われの伝わるケースもある。固有名詞、とりわけ姓名にはこうしたこだわりが字体に影響を与えるケースが、今なお新規にも生じることがあり、固有名詞の漢字に存する特殊な我が物としての意識が注目される。

死 「死ぬ」(たひる) は近年に生じた「死ぬ」の集団語であり、ネットを通じて普及した。「死ぬ」がサイト上でNGワードとされたために、それを回避したり、婉曲にしたりする意図もあった。また「死」から「一」を引くことで、死にそうだが死んではないということを表示しようとした可能性もある。コンピューターの文字コードの制約の中で、こうした新たな表現に変化してきていることがうかがえる。

- (本を品のように3つ) 近年、「本の森」の「森」に用いるなど、固有名詞やロゴマークとしてたくさんの本を含意して使用されることがある。なお、「森」は象形文字による単純な構成であるために、インスピレーションにつながりやすいようである。これを木が多いという形容詞ではなく、名詞「もり」として使うことは日本製字義である。日本人は、たいていこの漢字の構成によって、「森は林よりも木が多く、密集している」というイメージをもっている。「杜」の部首を木偏に換えた「杜」(もり) も日本製字義であり、奈良、平安時代から用いられている。「杜絶」の熟語や「杜甫」の名を知らずに、あるいは、意識せずに造った可能性は低いであろう。それらの識字者が意識しつつ、あえて字義をかぶせて造ったものと考えられる。
- (木土水を品のように) もり 森は実際には「木」だけではないのに、漢字がイメージを狭めるとして近年造られた字である。漢字はイメージを膨らませる文字といわれるが、実際にはこういう反作用的な現象も起こす。これはなるほどと共感され、一定の広まりを見せている。ただこれでも「虫」や「鳥」などは捨象されている。

なお、明治初期から現代に至るまで、造字を募集するコンクールがしばしば開催されてきた



〈図 2〉アマノハシタテへの造字
『運歩色葉集』

が、一般に残った造字は前述の「俔」くらいしかなく、とくに読みがフレーズのように長いものは現実の社会ではまず使われることはない。

最後に、造字の意図が読み取りがたく、造字方法が不明なものも残っている。関連する用例や発言の採集と蓄積が不可欠である。

- 𠂔(𠂔の日は日日日3段に)・□(𠂔に有有有2段)(あまの)はしだて これは中世期の『運歩色葉集』(天正15年本 古辞書研究資料叢刊 図2)などに出現し、連歌辞書である『詞林三知抄』などにも類似の字が見つけられるが、当時、「あまのいわ(は)ぐら」という、「□(岩3つの下に石3つでその下に聞)」という造字も国語辞書である天正18年本『節用集』に出現しており、関連する可能性がある。

𠂔 近年、人名に用いたいという要望があった。読みは不明だが、品が有る子に育って欲しいという願いを込めた字でとも考えられる。

3. 出自の認定に際して注意を要する事項

他にも下記のようなケースも存在しているので、漢字か日本製漢字かの判断には十分な注意を要する。漢和辞典なども、研究成果を十分に取り込む姿勢が求められる。

中国製だが、日本など主に外国に記録が残る字を、同様の書籍になぞらえて「佚存文字」と呼ぶ。山田1987も、こうした字への考証の必要性を唱えていた。筆者も試みてきたことだが(笹原2007a参照)、一語ごとに語誌が編まれてきたように、一字ごとに字誌、一つの表記ごとに表記誌が編まれ、蓄積されていく必要がある。

𧈧 仏典にある「蛛」の異体字(笹原2007a)。「𧈧」に対する「𧈧由」も、仏典にある異体字であった(『随函録』)。「𧈧」で「菩薩」を表す略記も唐代の仏典に多数見られる略合字が、日本に今なお受け継がれているケースである。

𧈧 仏典にある「璽」の異体字で、素材に即して部首を改めたものであろう。『日本書紀』α群という中国系の筆録者によって記されたとされる部分に出る唯一の「日本製漢字」と目されたものだったが、やはり『随函録』にあることから、漢字であったことが明らかである。

- (𧈧の国は國)「佛」の中国製の異体字である。日本人が会意文字を好む傾向に合致し、日本で江戸時代から多用された。唐代の則天文字も、東アジアで一時期、周圏分布を呈したが、とりわけ「𧈧(國・国)などは日本で長く好まれてきており、現在でも人名などに見受けられる。

𧈧 キノコの意は国訓とされてきたが、平安時代の『和名抄』が漢籍の『崔禹食経』から引く用法である。鮎貝1972に「漢字にもあれど意義全く異り」⁴⁾などとなるように、タケの意をもった「耳」への草冠の付加はまず古代に中国で起こり、それが韓国を経由して(金1983)、日本に入っ

たものであろう。

畠 これも古代における中国や韓国における熟語「白田」の使用を受けて、日本で生じたものであろう(上述参照)。

閑 中国の『龍龕手鏡』における「ㄣ勞」としてのこの字体と、仙台の地名の「ゆり」などとは衝突にすぎないか。近世の仙台では、ほかに「苺」(たばこ)も中国の別系統の同じ字体と衝突をきたしている。

上記のように、日本で生じた字義には、ある字体に漢字義を知った上で生じさせたものと、その存在を知らずに生じさせたものがある。そのいずれもが日本製字義となるが、前者には、字義の日本における転化によるものも含まれている。

□ 字音

和 日本での字音「ワ」の通用による「倭」への当て字であった。イメージを転化させた。字音における日本製字義には「国訓」という術語が用いられているが、「訓読み」と混同されがちである。「大和」で「やまと」に当ててるが、この和語は元は山処の意と考えられる。

的 「組織的」などの「的」(テキ)は、明治初期に、英語接尾辞「-tic」に対して、中国白話の「的」(の)を当てた遊戯性のある当て字に端を発することが同時代の大槻文彦の記録によって知られている。

乳 1980年にニュージーランドの略称(ニュウ)として、この字が一時的に採用された。典拠のある「新」も案にはあったが、シンガポールと衝突してしまう。当時は大使館による公募での最多得票ではやむをえないと思われたが、本国から畜産物の輸出国としてのイメージに合わないとして却下された。現在、「NZ」だが、これでは「HNZ関係」などとは使えない。

腥 部首は月ではなく肉月であり、なまぐさい・豚の霜降り肉という字義だが、字面からの字源俗解で「月」と「星」と別個の会意文字として見立てる人が多い(笹原2006)。良いイメージを惹起し、セイと読ませる人名として新生児に使用したいという要望が複数あった。WEB上でのハンドルネームにはすでに使用されている。背景には、画数占いによる命名の流行と、漢字を画面上で見ることが増えたことによるイメージ化を挙げることができる。これは、手書き機会が減少し、日本製漢字が新しく産出されることが難しくなった反面、既存の字に対しては同様の着想が与えられるという新たな局面を反映しているとみることができる。

4) 鮎貝房之進、『俗字攷』、国書刊行会、1931、1972復刻 pp.98; 金 鍾埴、『韓国固有漢字研究』、集文堂、1983、pp.44 & 193参照。

□ 字音と字訓

- 粹 この字は、江戸時代には「いき」(東日本)、「スイ」(西日本)と地域によって読み方と意味に差を持っていた。混じりけがないという字義から、江戸、上方の都会的、洗練された美意識を表すようになった。なお、「侘」「寂」や、熟語の「幽玄」なども日本的な独特な美意識を表す語義に変化したものである。
- 竜 訓と音で「たつ・リュウ」と読むが、字体の印象から、近年では西洋のドラゴンとするイメージが高まっており、実際に「龍」は中国など東洋のリュウとして区別する意識が若年層を対象とした小説やゲームなどで広まっている。この字は「たつ」、「龍」は「リュウ」という意識も特定の熟語などから生じてきている。「ドラゴン」という読みを与えるケースさえも現れている。
- 曖 これを人偏にしたものと合わせて、「アイ」「ほのか」と読んで、同じく新生児に用いたいという要望が複数あった。「ほのか」には「仄」「佛」「穂乃香」などもありうるが、この字のぼんやりとしているという字義は意識にのぼらずに、字面から抱かれるイメージが一部で好まれてきた。日偏のほうの字は、熟語で「曖昧」としての使用頻度数も高かったため、2004年に人名用漢字に採用されるに至った(現在では常用漢字)。命名権や表現の自由もあるが、無防備な子供を自己の表現のためのメディアとして扱うことの是非が問われる。
- 因 圀「大」「幸」の代わりに、「因好き」「圀せ」などと、本来の字義を考慮することなく、女子中高生の間で手書き、電子機器を問わずに用いられている。「くにがまえ」が単なる飾りと化している。「因囚」で「大人」のようにも用いられており、使用に関しては音訓意識が見受けられない。

□ 字訓

- 極 江戸時代から「きわめる・きわまる」という字訓が転化し、「きめる・きまる」とも用いるようになった。これらの読みは集団文字化し、駐車場などで「月決め」を今でも「月極」と表記する業界がある。
- 鮓 和食の「すし」に当てるが、奈良時代に「鮓」とともに熟れずしとして使われていたことが木簡からうかがえる。そこから、近世江戸でのすしの隆盛を経て、江戸前ずしの表記として定着したものである。
- 混 明治以降、「混(こ)む」が「込む」の意味・表記の領域にまで入った。「混雑」と混淆し、新たな語源意識、俗解の定着をみた結果、明治期に使用され始め、改定された常用漢字表について採用された(笹原2010)。
- 絆 「きずな」と読み、2011年のキーワードになった(新語・流行語大賞や今年の漢字などに選ばれた)。かつての束縛の字義、語義から、人と人とのかけがえのない繋がりというプラスの意味に転化したが、まだ漢和辞典ではほとんど対応がなされていない。

□ 読みのない記号的な用法

ㄆ サンと読む漢字だが、JIS第2水準に採用されているために、パソコンや携帯電話などで、「☆ㄆ」と用いて流れ星を表す、いわゆる顔文字として使われている。携帯電話などに搭載されている絵文字は、さらにこの応用と位置づけることも可能であり、一種の象形文字などとして、漢字などの代わりに用いられることさえ生じている。日本では、電化製品の「切」、タンクローリー車などの「危」、雑誌の「短丈」、料金表などの「小人」など、漢字の読みよりも意味を伝えようとする表意用法が存在しており、そうした読みと乖離した文字遣いがさほど抵抗なく受け入れられる傾向が指摘できる。

別個に作製した字が、字体・用法が一致しない現象を衝突と呼ぶ。これは、日本製か否かを判断する際には重要な概念となる。

垚 「ぬた」(湿地) は山梨の地名に見られる地域文字である。中国ではdai4で耕地として使われる地域文字であり、韓国製漢字としてのdae(敷地)などと衝突を起こす。

一方、暗合は、別個に作製した字が、字体・用法ともに一致する現象である。

珈琲 coffee コーヒー 「口加口非」という表記が主流の中国では、玉偏のこの2字による表記がかつてあったとしても少なく、伝承、使用がなされなかった(笹原2006)⁵⁾。あるいは日中で暗合も生じたものだろうか。日本では、この漢字表記は江戸時代以来見られ、そこに一種の表現効果が認められて喫茶店や商品などで使用されることがあり、カタカナやひらがなによる表記よりも高級感、本格感などを意識する人が多い。こうした意識と表記との先後関係の解明が求められる。

漢字圏における字の相互伝播の結果、出自の認定に問題を生じることがある。

串 ほとんどの辞書などで「くし」は日本製字義とされてきたが、歴代の漢字圏の文献を通して検討した結果、中国の「𦵑」(くし) が中国か韓国か日本でこの形にしたものなのかをさらに見当する必要があると考えられるに至った(笹原2012)。「鮑」「𪚩」を「あわび」とするものも古代の文献が散逸しており、考証が難しい(笹原2012)。前者に「あわび」の字義が生じたのは、日本か韓国か中国か、後者も字自体が生じたのが日本か韓国か、文献による十分な検討を要する。

囍 音読みは「キ」で、双喜字という名称もある。日韓ともに日本製漢字、韓国製漢字と認定するケースがあるが、もとは清代ころに中国から伝播した文様であった。

5) 笹原宏之、『日本の漢字』、東京：岩波書店、2006、pp.199に最古例の写真が掲載されている。る一層の調査が求められるものである。

釦 button 服のボタン(江戸時代にはポルトガル語由来)としての字義は、明清期の中国に端を発するものであろう。日本では、スイッチの意としても用いられているが、一般に読めなくなっている。

出自は明白であっても、その用法に新たな展開が他国で生じるケースも確認される。

躰 日本製漢字では「しつけ」だが、現在、韓国の人名にも、miという発音で使用されており、大法院も使用を認めている。

辻 日本製漢字で「つじ」と読むこの字は、姓としてとくに西日本で多用されており、韓国にそのまま帰化してsibと発音されているケースがある。

彌 草(くさ) 彌(なぎ)の2字目は日本製漢字であり、根拠は不明だが、韓国ではnanと発音されることがある。秋田県発祥の姓であり、地元では平安時代以来の長い歴史をもつとの伝承がある。「辻」「畑」「畠山」「蛭原」「笹原」などは、中国、韓国の書誌情報などでの発音をどうするか、国際化社会と情報化社会の中で、解決が求められる課題となっている。

出自に関する判定は、慎重に行う必要がある。たとえ歴史の浅い字であっても同様である。たとえば下記の単位を表す略記のための字は、出自に関して種々のラベリングが行われてきたが、中日韓のいずれが先に造字、字訓の追加を行ったものか、近代の各分野における文献によ

噸	ton	トン	呎	feet	フィート
吋	inch	インチ	哩	mile	マイル

IV. おわりに

日本では、古代からの書籍のほか、文書、金石文、木簡などが大量に現存、伝存している。その中には、ここまで記したとおり、時代ごとに日本語をその場ごとに最もしっくりくるように表記しようと努める人々によって、会意を中心とした造字法に基づき、新たな造字やそれに準ずる字体、字義、字音に対する改造がなされ、またそれらの選択による廃絶と継続的な使用とが行われてきたのである。

そのため、今なお文献の母集団が確定せず、日本製漢字の総体は調査を進めるごとに千という単位で増加しつつあるのが実情である。そうした中でも、具体例からは、日本独自の事物や概念・語への造字、「雪」「花」「風」などの要素の選択には、他国には見られない情感が反映していることもうかがえた。時代によって、日本製漢字を支える使用者の層は拡大し、近代に至るまで細分化も進んでいたことも、その多様性に複雑な状況を生み出す一因となっていたのである。

各種の調査研究の蓄積を通じて、「腺」のように、個人が造って、一人だけの使用を経て集団文字と化し、ついに共通の文字となったことが解明されたケースもある。この字は、中国や韓国でも使用され、今でも特に中国では常用の文字となっているものである。本稿に示した造字法や使用者層などの枠組みを用いて、文献など客観性の高い資料を広く活用することで、その複雑で多様な動態を背景となった社会や文化の状況と合わせて究明し、漢字圏における文字の共通性、そして種々の交流の歴史による相互の影響関係、さらに各国の文字の独自性の確認を、各国で協力して行っていく必要があると考えられる。

〈参考文献〉

- 金 鍾埴,『韓国固有漢字研究』,集文堂,1983.
- 中田祝夫,「日本の漢字」,『日本語の世界』4,東京:中央公論社,1982.
- 三矢重松,『国語の新研究』,東京:中文館書店,1932.
- 笹原宏之,「日本製漢字の地域分布」,『日語日文学研究』46,2003.
- _____,『日本の漢字』,東京:岩波書店,2006.
- _____,『国字の位相と展開』,東京:三省堂,2007a.
- _____,「日本製漢字「𪛗」の出現とその背景」,『訓点語と訓点資料』118,2007b.
- _____,「「𪛗」の使用分布の地域差とその背景」,『国語文字史の研究』10,大阪:和泉書院,2007c.
- _____,「改定常用漢字表と日本語表記」,『日本語学』29-10,明治書院,2010.
- _____,『当て字・当て読み 漢字表現辞典』,東京:三省堂,2010b.
- _____,「異体字・国字の出自と資料」,『「字体規範と異体の歴史」国際シンポジウム』,東京外国語大学,2011.12.18.
- _____,「クシを意味する「串」の来歴」,『第三屆漢字與漢字教育國際研討會』,北京師範大学,2012.8.18
- 佐藤 稔,「擬製漢字(国字)小論」,『国語と国文学』76-5,1999.
- 菅原義三,『国字の字典』,東京:東京堂,1990.
- 鮎貝房之進,『俗字攷』,東京:国書刊行会,1931,1972復刻.
- 山田俊雄,「いはゆる国字の一つについての疑ひ」,『成城文芸』120,1987.
- 山下真理,「「広」の字体について: - 略字体の出現時期とその要因 -」
- (http://www.kanken.or.jp/incentive_award/pdf/22/yamashita.pdf 2010 日本漢字能力検定協会 2012/08/23確認)
- 山下真里,「異体字が広まる一過程:「鉦」という字体を一例に一」,『訓点語と訓点資料』128,2012.

乾 善彦, 『漢字による日本語書記の史的研究』, 東京: 塙書房, 2003.

エツコ・オバタ・ライマン, 『日本人の作った漢字』, 東京: 南雲堂, 1990.

謝辞

本稿は、檀国大学校東洋学研究院「東アジアの辞典学(Ⅲ) 東アジア固有漢字の国際標準化と辞典編纂」(2012.2.10) において発表した原稿に基づくものである。席上、ご教示下さった先生方、有益なご指摘を下された本誌査読委員の先生方に深く御礼申し上げる。

History and structure of Japanese-made Chinese characters SASAHARA, Hiroyuki

Chinese characters, Japanese-made Chinese characters, Korea-made Chinese characters, liushu, Philology

* 이 논문은 2012년 6월 29일에 투고되어,
2012년 7월 27일에 편집위원회에서 심사위원을 선정하고,
2012년 8월 16일까지 심사위원이 심사하고,
2012년 8월 20일에 편집위원회에서 게재가 결정되었음.

日本製漢字의 變遷과 形成方法*

笹原 宏之**

김 인 홍 譯

국문초록

초록 日本製漢字라는 것의 實態를 解明하고, 그 背景을 파악하는 연구를 진전시키기 위하여, 그 발생과 변화의 動的인 歷史에 관하여, 現存資料를 가지고 밝혀보겠다. 그것은 日本製字体(日本製の異体字)와 日本製の 字音, 字義에 모두 관련하면서, 奈良時代 이전부터 발생하고, 시대의 변화에 응하면서 만들어져 왔다. 日本製漢字는 造字法(構造)면에서 보면, 한자와는 다른 會意文字가 많지만, 그것은 形声文字와의 親和性이 높은 漢語가 아닌, 和語와 外來語라고 하는 語種을 표기하려는 목적과 깊게 연결된 결과라고 말할 수 있다. 더욱이 日本製漢字는 그 使用者層 등의 分類관점도 추가하는 것에서, 처음으로 개개의 글자가 必要에 응해서 만들어지고, 社會生活을 영위하는 사람들 사이에 정착하여 온 복잡한 움직임을 입체적으로 파악하는 것이 가능하게 된다. 今後は 具體的인 文字資料의 意義를 확인하면서 그것을 충분히, 그리고 진중하게 활용하여, 日中韓의 개별적인 문자사용의 通時的狀況과 共時的狀況을 파악하고, 서로의 영향관계를 충분히 확인하여 가는 것이 중요하다.

[주제어] 漢字 日本製漢字 韓國製漢字 六書 文献學

目 次

- | | |
|----------------|---------------------------|
| I. 서 論 | Ⅲ. 日本製漢字의 使用層과 造字法에 의한 分類 |
| Ⅱ. 日本製漢字의 歷史概要 | Ⅳ. 결 論 |

I. 서 論

本稿에서는 일본에서 만들어진 漢子(国字)로 여겨지는 것에 대하여, 그 발생과 史的 변화에 관하여 현존

* 本稿는, 과학연구비 보조금 과제「現代에 있어서 和語名詞의 표기 실태와 그 배경에 관한 조사연구」(基盤研究(C))의 성과를 포함하고 있다.

** 早稲田大学 社会科学総合学院 教授 / sasa@waseda.jp

하는 자료를 바탕으로 구축된 역사를 정리하여 서술한다. 日本製漢字에 관한 종래의 연구 성과는 다른 분야에 비해 많지는 않지만(笹原2007a), 그것들을 근거로 하면서, 大局적인 観点에서 그 動態와 그것을 탄생시킨 背景을 客觀적으로 파악하는 것을 목적으로 한다. 이것에 부수해서, 日本製漢字의 位置를 명확하게 하기 위하여, 日本製字体(日本製の 異体字)와 日本製 字音, 字義를 수시 참조한다.

이어서, 이들의 사용자층, 생성 패턴 등, 새로운 관점에서 그것들에 대하여 분석을 한다. 그것들의 구체적인 예를 표시하는 것에 의해 日本製漢字가 가진 主要한 傾向을 해명한다. 그 위에 개개의 字에 관련해서 판명된 내용에 대해서도 알아보겠다. 出自와 字源해석 등의 認定에 가끔 눈에 띄이는 安易한 俗解를 일으키지 않기 위하여, 이후 주의해야만 하는 점에 대해서도 서술하겠다.

Ⅱ. 日本製漢字の歴史の概要

日本製漢字의 通時的 變化에 관한 체계적인 파악은, 여전히 보이지 않기 때문에(ライマン1990、佐藤1999ほか参照), 本稿에서 記述을 시도한다. 1세기 일본은, 중국(後漢)으로부터 한자가 써진 金印을 수여받고, 이어서 중국 대륙과 한반도로부터 渡來한 사람들과 전래된 문헌을 통하여 한자를 본격적으로 이입하기 시작했다. 5~6세기 무렵에는, 일본어(和語)를 한자로 표기하기 시작한다. 그 이래로, 한자는 일본열도에 있어서, 그 形・音・義로부터 用法에 이르기까지, 모든 면에서 일본화를 동반하면서, 일본어를 표기하기 위한 문자로 변모해 왔다.

그 때는, 일본 고유 언어인 大和言語(和語)에 대한 음독에 의한 假借, 이어서 大和言語에 의한 훈독이 행해졌다. 이것들은 당시, 한반도로부터 도래한 사람들의 영향을 강하게 받아 성립한 것으로, 일본어의 단어뿐 아니라, 일본어 문법에 의한 문장마저 한자만으로, 한문풍의 変体漢文으로 표기되어 갔다.

「京」이라는 글자가 倉(창고)의 뜻으로도 중국에서 사용되게 되고, 그것을 받아들인 한반도에서는 그것에 木偏을 붙여서, 수도라는 뜻을 가진 용법과 구별을 하여, 「棟」으로 사용했다. 그것이 일본에도 영향을 주어, 「棟」을 「くら : 쿠라」라고 읽기 시작했다(笹原2007). 현재에도 近畿지방을 중심으로 그 用字가 지명이나 姓에 많이 남아 있다. 특히, 「まら : 마라」라고 읽게 된 「手」도 일본에서 만든 한자라고 인식된 적이 있었지만, 실제로는 「閉」의 이체자 「閉・閉」의 「門」이 「冂」처럼 중국 북부와 한국에서 쓰인 것 이라고 이해된다(笹原2007a).

7세기에는, 중국에서는 チャンチン[찬친 : 香椿]이라는 나무와 전설상의 靈木을 가리키는 「椿」을, 「츠바키 : ツバキ」라고 읽은 日本에서 만든 字義(国訓)가 観音寺遺跡에서 出土된 木簡에 보이는데, 이것이 일본인의 풍토와 감성에 맞게 한자를 개조한 早期의 행위라고 간주 할 수 있다.

특히 극적인 변화는 한자를 새로 만들기 시작한 것이다. 「靱」으로 무구인 「토모」とも : 활팔찌)를 표현하는 일본제한자도, 역시 木簡이나 『古事記』에 보이고 있다. 「靱」은 소재를 나타내는 「革」과 「とも : 토모」

의 형태를 본뜨기 위하여 선택되었다고 판단되어지는 「丙」으로 이루어진 最古層의 日本製漢字이다. 이것은, 일본 고유의 언어(和語)에서 물건의 이름이나 명사, 고유명사를 표기하기 위함이다. 일본에서는 단음절의 漢語가 아닌, 일본 고유의 언어를 표기하기 위해서는 六書에서의 形聲文字보다도 會意文字가 선호되는 경향이 있다.

奈良時代에는 『万葉集』에 においてカキノモト 히로마로(柿本人麻呂)가 「憾孺」(おとめ: 오토메) 첫 글자 등의 字를 개인적으로 만들어서 사용했다는 것이 알려져 있다. 또, 正倉院文書에서는 「日下」를 「くさか: 쿠사카」라고 읽는 훈독(熟字訓)을 다시 세로로 한글자로 만든 습자도 발생했다. 이러한 가차나 훈독(熟字訓)은, 「本來的、一般的인 字音이나 字訓, 字義에 따르지 않고」 행하여지는 「語의 表記」¹⁾의 하나로 자리매김 할 수 있는 것이고, 넓은 의미로서의 取音字(当て字²⁾)로(笹原2010b) 부르는 것도 가능하다.

奈良時代 전후에는 「鰐」(이카루가: 이카루가 鳥の名), 「鯰」(나마즈: なまず 魚名), 「鮑」(아와비: あわび 貝名)처럼, 고대 중국의 한자가 漢籍이나 佛典 등에 의해서 전해져 왔다고 판단되는 것들도 금석문과 문서, 서적 등에 사용되고 있다. 후대의 『和名抄』에는 『漢語抄』나 『本草』 등 漢籍처럼 보이는 자료가 인용되어 있다. 그러나 이것들에 현존하는 다양한 자료의 검토를 추가하면, 예를 들어, 「鮑」와 그 부수를 치환한 「咆」는, 下記와 같이 출현하고 있다(笹原2011). 아래의 네모상자 표시는 제일 오래된 예가 있다는 것을 나타낸다.

現存記録年代

	鮑	咆
日本	7世紀	8世紀
韓国	10世紀	8世紀
中国	7世紀	14世紀

중국에서는 오래된 기록을 잃어버렸기 때문에, 일본에서 만든 한자처럼 보이지만, 중국에서 만든 것이기 때문에 日本製漢字가 아닌, 「佚存文字」로서 구별해야만 할 것이다. 「畠」(하타케: はたけ)도, 그 가능성이 있다. 「畚」의 일본으로의 전래는 오래되어, 8世紀 正倉院宝物에 기록된 예가 확인된다(笹原2007).

中国	田(水田・白田・火田)
韓国	畚 田
日本	田 畠 火田・畑

8세기 나라시대에는, 한자의 「樞」(교우: キョウ 材料가 되는 木)을 「檉」(가시: かし), 한자의 「鵲」(이

1) 笹原宏之, 『当て字・当て読み 漢字表現辞典』, 東京: 三省堂, 2010b, pp.892参照.

2) 역자 주: あて-じ [当て字・宛字] 한자 본래의 뜻과는 관계없이, 그 음이나 훈을 빌려 말을 표기하는 한자. 또는 그 용법. (「めでたい」를 「目出度い」, 「やたら」를 「矢鱈」, 「クラブ」를 「俱樂部」로 쓰는 등)

쓰: イツ)를 「鳴」(시기: しぎ)로, 일본인이 고유 일본어로 이해하기 쉽게, 또 이미지도 풍부하게 표현할 수 있도록 개조한 日本製漢字도 금석문이나 『万葉集』 등에 나타나, 한자에서 日本製漢字로 교체해 나간다.

주로 고유 명사의 표기에 이용되는 「俣」(마타: また)는 한자 「俟」(마즈: まつ)를 변형시킨 것으로 생각되지만, 「矢」를 「天」처럼 표현한 이체자나, 다른 字의 이체자는 중국에도 이전부터 있었다(字体만이 충돌한 예, 혹은 응용한 예라고 말 할수 있다). 현존하는 『古事記』 『日本書紀』, 『万葉集』 『風土記』에는, 이체자로 기록되어있지만, 정창원문서등 당시의 肉筆에서는 전부 「俣」라고 기록되어 있어, 이는 잘못 옮겨 적은 것에 지나지 않았다.

이러한 현상은, 한자가 일본화 되어가는 과정이라고 말할 수 있다. 만요가나(万葉仮名)에서 「伊和之」 등으로 기록되어 있던 물고기 이름에는, 平城京木簡에 出現하는 「鰯」(이와시: いわし)처럼 의미가 대응하는 한자를 찾아내기 어려운 것에도 日本製漢字가 만들어져 간다. 다른 물고기 이름의 표기와의 대칭성이 요구된 것도 한 요인이라고 판단되어진다. 일본 독자적인 神事に 이용하는 「사카키: さかき」라고 하는 나무의 이름도 「賢木」 등으로부터 「榊」 「木祀」의 日本製漢字가 생겨나왔다(下記의 「小学篇」에 수록되어져있다). 지방 관리가 만들었다고 여겨지는, 지역의 독자적인 日本製漢字도, 일찍부터 각지의 『風土記』에서 볼 수 있다. 変体漢文, 万葉仮名가 섞인 문장이나, 漢詩文이라는 漢文体에서도 음독뿐만이 아니라, 훈독을 전제로 해서 사용되게 되었다.

이러한 日本製漢字를 모은 「小学篇」이라는 사전도 편찬되어져 있었다는 것이, 후대의 『新撰字鏡』에서 짐작할 수 있다. 나라시대에 있어서는 日本製漢字가 이미 수백 자까지 증가했다. 金石文이나 文献, 文書 등 다양한 자료에 그것이 나타나 있다.

여기까지 나온 字를 중심으로, 용법별로 出自등을 분류하면 下記와 같이 정리가 가능하다. 魚偏 등, 여러 종류 部首에 있어서도, 같은 모양으로 6가지 정도로 분류가 가능하다.

〈表 1〉 漢字・日本製漢字の用法別の出自などの分類

例字	音訓	類別	属性
木	「ボク・モク」 「き」	漢字 漢字義	音読み (象形文字) 訓読み
椿	「チュン・チン」	漢字 漢字義	音読み (形声文字) 靈木・チャンチン
榊	「つばき」 「さかき」	日本製字義 日本製漢字	訓読み (会意文字) 訓読み (会意文字)
魚	「ギョ」 「うお・さかな」	漢字 漢字義	音読み (象形文字) 訓読み
鮎	「ネン・デン」	漢字 漢字義	音読み (形声文字) なまず
鰯	「あゆ」 「いわし」	日本製字義 日本製漢字	訓読み (会意文字) 訓読み (会意文字)

8세기말의 헤이안(平安)시대 이후, 다양한 문화가 일본풍으로 발전한다. 표음문자인 히라가나(平仮名)와 카타가나(片仮名)가 한자로부터 파생하고, 인도의 법자의 영향을 받아서 그것들에 의해 오십음도도 형성된다. 가나는 간략하고 쉬워 서민에게 퍼져 가지만, 어디까지나 「가나 : 仮名」 이어서, 「마나 : 眞名」 즉, 진짜 문자로 인식된 한자 쪽이 보다 가치가 있고, 격이 높다는 의식이 강하게 남아 간다.

空海の筆跡에는 「円」(圓)과 같은 일본의 독특한 이체자도 나타나기 시작하고(笹原2006), 귀족이 짓는 和歌 등에 사용되어진 「句」(におい・動詞는 「におう」)는, 「韻」의 이체자가 정착한 것으로, 한자가 가지고 있던 의미가 한정되고, 게다가 음독 「イン」을 잃어, 日本製漢字같은 느낌을 늘려 간다. 『江談抄』에 「畠」은 日本製漢字는 아니라는 언급 등, 日本製漢字에 대한 의식도 짝이 트고, 연구도 시작되고 있다. 同書에는 발해국使者 이름의 造字 「柁」(どぶり) 「柁」(ざぶり)도 보인다(後에 『節用集』 등에도 登録된다). 이것들은 실제로는 日本製漢字일 것이지만, 다른 나라의 造字를 취급한 점과 후대への 영향 (柁) 이라는 점에서 중요하다.

게다가 명사는 한자로 쓰고 싶고, 단어(개념)는 한자 한 글자로 쓰고 싶다는 일본인 지식층의 의식이, 日本製漢字를 만들어 냈으며, 사용해 가기 위한 원동력이 된다. 당시 한자를 만들어 내는 층은 대체로 漢籍의 소양이 있어, 「辻」(つじ)는 중국의 「十字街」(『北史』 등)를, 「柁」(さかき)는, 중국에서의 「蚕」의 俗字 「𧄸」에서 따온 것이라 여겨진다. 「辻」(まろぶ, 나중에 「すべる」), 「木佛」(しきみ) 「佛」(おもかげ)도, 説話集인 『今昔物語集』에 등장한다.

이와 같이 11세기후반부터의 院政期の 신흥한자의 萌芽를 거쳐, 12세기말부터의 가마쿠라(鎌倉)시대 이후, 武家が 정권을 잡는 중세시대가 되어, 한자의 사용층이 넓어져 가는 것에 의해, 文臣이나 승려뿐만 아니라, 武士、連歌師(전문적인 연가 작가) 등의 새로운 시대의 신흥 문예가, 장인 등 사회집단마다, 造字가 널리 행해지게 되어간다.

武器 「槍」(아리 : やり 鎗)에서는 「鎗」라는 훈독(遣 : やり)를 이용한 일본제한자가 나타난다. 「畑」(하타 : はた)는 가마쿠라(鎌倉)시대에 화전농업의 진전과 함께 등장하고, 점차 「畠」(はたけ)와의 구별 없이 혼용되어져 가게 된다. 「働」는 앞에서 서술한 바와 같이 「하타라쿠 : はたらく」가 「働」이라고 쓰여져 있던 것을 근거로, 이 역시 中世에 「人偏」이 부가된 것으로(후술하겠다), 『平家物語』 등의 軍記物에서는 잇따른 전투에서의 공적을 나타내고 있다.

14세기에 시작된 무로마치(室町)시대에는, 물고기 이름 「タラ」에는 公家日記 등에 「鱈」이 나타나고, 또 예의를 몸에 익히게 하는 것을 의미하는 「시쓰케 : しつけ」는 禮法書 등에 「躰」와 「身花」로 나타난다. 산길에서 가장 높은 곳은 일본에서는 여행자의 수호신인 道祖神이 있고, 지역의 경계가 되는 특별한 곳이었다.

日本製漢字의 「峠」(토우게 : とうげ)는 「嶺」과는 다른 개념의 語로, 「峠」는 중국의 「弄」의 俗字 「𡵓」를 근거로 하면서도, 日本의 독자적인 개념을 「山」「上下」와 회화적으로 표현한 것이라 말할 수 있어, 이 시대의 여러 서적에 등장한다. 「畑」나 「峠」와 같이 자연에 관계된 복수의 자형으로 그 뜻을 합성하여 새로운 한자를 만드는 會意 造字가 눈에 띈다. 대체로 일본인이 花鳥風月이나 雪月花 등의 自然風物에 기댄 정서나 이미지를 존중하는 경향을 가진 것과 연결되었을 가능성이 있다. 『下学集』이나 『節用集』 등의 통속성을 가진

사전에서는, 그때까지의 『和名抄』 등의 「俗」가 변하여, 보다 한정적인 엄밀성을 가진 「倭字」라는 出自를 나타내는 술어가 나타난다.

무게의 단위인 「匁」(もんめ)는 중국에서 생긴 「錢」의 속자가 日本에서 변형하여, 훈독(モン은 字音由来이지만) 字로서 정착해 간다. 지명에도 造字가 각지에 나타나기 시작한다. 京都에서는 「榊辻」(なぎつじ)라는 지역의 독자적인 「榊」라는 会意의 日本製漢字도 만들어 졌다. 이것은 日本製漢字만으로 이루어진 지명이다. 또한, 베트남의 찰놈(chữ Nôm/字喃)에도 「빈체성: 빈첸쵸쵸省·檳榔省」의 체에 「榊」(tre 竹)가 있지만, 暗습(우연히 일치)한 것이라고 생각할 수 있다(暗습에 대해서는 후술하겠다).

무로마치 시대에서 에도 시대로 전환되는 시기에, 「笹」가 식물명이나 지명 등의 「ささ(사사)」로서, 문서, 문예작품 등에 나타난다. 필자의 姓氏는 에도시대의 富山에 있었던 가게이름으로부터 나왔다. 이 글자는, 「竹」와 「葉」으로 만들어졌다고 여겨지고 있다. 옛날에는 「ささ(사사)」는 「小竹(통소)」 「笹」(しのとも)가 많아, 「筴」라는 「笹」의 성부를 치환했는지 会意化에 의한 것도 中世期(鎌倉~室町시대)에 있었다. 특히, 중국의 金文에도 볼 수 있는 글자체이지만, 그것은 「世」로서의 사용이고, 게다가 後代에는 사용이 중단되기 때문에, 日中에서 개별적으로 만든 文字가, 우연히 형태만 일치한 것이다. 이러한 것은 字義까지 일치하는 暗습이 아닌, 衝突이라고 부른다(後述하겠다. 笹原2007参照).

덧붙여 이즈음에는 漢方醫의 암호와 같은 造字 「一字銘」도 집단문자로서 출현한다. 또 밖으로는 한자권에 서로 사용되어지고 있던 자종이나 용법이 다른 현상에 대한 언급이 많이 나타나고 있다.

17세기부터인 에도(江戸)시대에는, 중국의 속어 「鳳(風) 巾」으로부터 「凧」(たこ: 연)라는 日本製漢字도 만들어진다. 일본 독자의 문화인 戯作(오락소설), 日本刀, 日本酒에 관한 日本製漢字도 이시기에 늘어 간다. 歌舞伎나 浄瑠璃에서도 표지 제목에 좋은 운이 따르게 한 会意 造字, 合字를 많이 이용했다. 이와 같은 식자층의 확대에 따라 일반인들 사이에서도 놀이 도구까지도 日本製漢字로 표현되었던 것이다. 日本製漢字는 쓰는 측면만이 아닌, 사람들이 사용하는 語句에 영향을 끼치는 것도 생겨나, 「鱈」의 글자 모양으로부터 「旁」(つくり: 한자의 오른쪽 부분)의 雪이라는 異名으로 칭하는 것 같은 현상도 생겨났다. 게다가 일반을 겨냥해서 보고 즐기는 용도만의 유희성, 일회성이 높은 嘘字, 鈍字 비슷한 것도 양산되었다.

이러한 가운데, 日本製漢字 연구도 진전을 보여 아라이 하쿠세키(新井白石)가 『同文通考』에서 처음으로 「国字」 「国訓」이라는 술어를 日本製漢字나 일본화한 字義에 대응시켜 마련했다. 일본의 고서를 연구하는 국학자들은 木村正辞가 나라시대의 문헌에서 발견한 日本製漢字 「櫛」(つき 櫛) 등을 자기의 호에 부활시키는 등, 日本製漢字의 死字도 재이용했다. 이제까지 漢籍에 있는 한자를 중시하여 왔던 한학자들도, 林述斎가 隅田川를 표현하기 위하여 만든 「墨」같은, 日本製漢字를 雅稱을 위해서 제작하기에 이르렀다. 이 경우에는 음독을 가진 日本製漢字가 俗으로부터 雅로 전환한 것이다. 思想家 安藤昌益나 蘭方医의 海上随鸚고 같이, 자신이 필요로하는 표현을 위하여 日本製漢字(個人文字)를 혼자서 数百字 만드는 사람도 나타났다.

당시의 봉건적인 신분제사회 속에서 경칭인 「様」(사마:さま)를 상대와의 관계에 따라, 「様」 「様」이라고 구분하여 쓰는 대우표현이 나타난다. 日本製字義에 일본제 이체자를 교배시켜, 손윗사람과 아랫사람의 구별

이 그 장소 그 장소에서 글씨를 쓸 때 마다 행해졌다. 더욱이 그 신분에 따른 표기 구별에는 별도 레벨의 것으로는 서체나 히라가나도 이용되었다.

숙어훈독(熟字訓)으로 이용되기 위한 日本製漢字도 나타났다. 「はしたなし」를 「魁魁」라고 적는 종류이다. 이것들은 통속적으로 文藝에 나타나는 도움자(世話字)라고 불리는 한 무리의 문자에 속했다. 이 시기에는 日本製漢字로 표기되는 말은, 여러 품사에 걸쳐 다양하다. 일반적으로 조사에도 「鳧」 「鴨」 등의 한자가 해당되는 것은, 上代 이래 끊어지지 않고 이어졌다. 日本製漢字가 표현하는 語(음독)을 品詞로 분류하면, 下記와 같이 거의 대부분이 해당하지만, 名詞와 動詞가 대부분을 점하고 있다.

〈表 2〉 品詞と日本製漢字の例

名詞	畑	はた・はたけ
固有名詞	薊	なぎ(草薊) 坏 あくつ
動詞	働	はたら(く) 込 こ(む)
形容詞	訛	やさ(し)
副詞	耽	しか(と)
接續詞	扱	さて
感動詞	適	あっぱれ(「あはれ」から分化し、「哀れ」などと用法も区別された)
助詞	込	とて(とてもという副詞としても使用された)
助動詞	㒼	ます △(ム) ござ(る)

중세이후, 「鉾」(ビョウ)과 같은 형성문자도 만들어지기 시작한다(후술하겠다). 「勢」도 左上이 「生」이라고 일본의 음독 「セイ」를 보여주듯이 흘려 쓴 글자를 매개로한 일본적인 楷書의 자체가 선호되고 있었다. 서양의 네덜란드 의학으로부터 영향을 받아, 한방의 오장육부설에는 없었던 인체의 klier에 대한 「腺」이라는 글자가 만들어졌다. 또, 기존에 있던 「働」도, 旁이 「도우:ドウ」라고 읽히게도 되어, 「勞働」 「実働」 「稼働」이라는 일본제 한어(和製漢語)를 형성하기 시작한다(「仂」로 생략되어 기록되기도 한다). 이러한 日本製漢字는 중국과 한국, 베트남에도 전파되고 퍼져나가 일부가 정착했다.

일본옷(和服) 「쓰마(つま)」는 「妻」라는 글자의 훈독(주로 발음만)을 이용해, 衣偏을 더해 「褌」를 만드는 응용도 행해진다. 「褌」는 「가미시모:かみしも」(무사의 예복)는, 「上下」, 다시 「ネ上ネ下」를 거쳐 태어난 合字이다. 더욱이 피부병을 의미하는 「はたけ」는 日本製漢字 「畑」에 「やまいだれ:疥」를 붙인 것까지 雑俳書에 나타난다. 日本製漢字를 이용한 새로운 日本製漢字라 할 수 있다. 그리고 왜국체제 속에서 北海道, 青森로부터 九州, 沖縄까지 각지에서 성명과 지명, 방언을 표시하기 위한 日本製漢字, 日本製字義가 만들어 졌다.

이렇게 해서, 에도시대까지 日本製漢字는 수천종류 만들어졌다. 주요 日本製漢字에 관한 연구서도 편찬되

었다. 한국에서의 日本製漢字(白石書簡에 「𠂔典」)나 日本製字義에 대한 언급도 발생하고 있다.

19세기 후반 메이지 시대, 요컨대 근대에 들어가면, 활발 인쇄와 보통 교육이 보급되어, 日本製漢字의 생산은 격감한다. 에도시대 통속소설의 흐름을 이어받은 오자키 코요(尾崎紅葉)는 「□(泉の下に〴〵)」(ゆ 温泉の意) 등을 작품에서 만들어서 사용했다. 킬로미터에 「𠂔」, 밀리미터에 「𠂔」라는 日本製漢字도 만들어서 한 자권에 보급했다. 근대의 国語国字 문제에 대한 논의 중에 国字(일본에서 이용하는 글자의 뜻)를 개량하려고, 새로운 글자도 제안되었지만, 실제 사용과는 거리가 먼 것뿐이어서 보급할 만한 것은 없었다.

인력거의 발명에 대응하여 「俚」(구루마:くるま)라는 日本製漢字도 만들어졌다. 신문에서의 造字현상공모에 의해 선택된 것으로, 모집에 응한 창작 한자 중에 실제로 정착한 유일한 것이다.

또, 성명에도 造字가 증가해, 「十」의 종선을 치켜 올려 「모기키(もぎき)」라고 읽는 성도 나타났다. 象形文字, 指事文字라고 부를 수 있는 소수의 것이다. 名字(姓)에서는 본가와 분가를 이체자로 구분하여 사용하는 섬세한 표현도 증가한다.

여기에서, 일본제한자가 표현하는 말의 語種도 전부 갖추어졌다. 和語는 다수여서, 수천종이 넘을 것으로 생각되어진다. 다음의 예를 보자. 밑줄 친 부분이 일본제한자. 「/」의 왼쪽이 常用漢字表内字.

和語	畑 働く 込む / 辻 鱈
漢語	柶(漢字の「籩」の音読みのワクが語源) / 炬燵 饅飩 澆測 鉞・鮫鱈(語源説に複数あり)
外來語	なし / 苳(タバコ) 𠂔 金土金丹(トタン) 鉞力(ブリキ)

日本製 異体字도 새로 만들어졌다. 「廣」은 문서 속에서 「広」으로 생략되고(山下2012)³⁾, 등사판이 보급되는 동안에 사회활동가들 사이에서 「機」를 「木キ」, 「議」를 「言ギ」으로 생략하는 것 같은 자체도 사용하게 되었다.

전후에는, 놀이로 만들어진 「축약자(感字)」인 「□(女の右に𠂔)」(엘리베이터 길)이 유명해지는 등, 사용되는 수준까지 도달하지 않았어도, 축약자중에서도 어느 정도 널리 알려지는 것도 나타났다.

다만, 활자 인쇄나 한자 정책, 근대 교육, 그리고 PC등의 보급과 확산에 의해, 점차 조자 행위는 감소해 나간다. 한자 자체가 감소해 가고, 히라가나, 가타카나나 로마자의 사용도 증가하는 가운데, 2010년에 개정된 「상용한자표」에서는, 「匂」(臭い도 채택) 「𠂔」(縣命 표기로서)외에, 「腺」이 채택되었다. 이 글자가 개인에 의해서 만들어지고 나서 200년 만에 공통의 글자로서 인정되었던 것이다.

3) 山下真理, 「「広」の字体について: -略字体の出現時期とその要因-」

(http://www.kanken.or.jp/incentive_award/pdf/22/yamashita.pdf 2010 日本漢字能力検定協会 2012/08/23確認)に、出現状況が詳しく追跡されている。

Ⅲ. 日本製漢字의 使用層과 造字法에 의한分類

1. 使用者層에 의한 分類

문자는 그 사용자층에서 下記와 같이 분류 가능하다.

共通文字：漢字政策상의 常用漢字表・人名用漢字表 등.

地域文字：特定地域에서 使用된 文字.

集團文字：特定 社會集團에서 使用된 文字.

個人文字：特定 個人에 의해 使用된 文字.

場面文字：特定한 場面・環境에서 使用된 文字.

이 분류는 문자의 출처와 비교해 보는 것이 가능하다. 이것에 의하면, 예를 들어 「腺」이라는 宇田川榛齋가 만들어 혼자 사용하던 일본제한자가 어떠한 과정을 거쳐 퍼지게 되었는지의 파악이 가능하게 된다.

우선, 일본제한자의 지역문자에는, 다음과 같은 것이 존재하고 있다. 奈良시대에 이미 『風土記』의 産物 諸字에는 중앙에서만 아니라, 지방에서도 이미 造字가 행해지고 있었다고 생각되는 케이스가 눈에 띈다.

杵 いり 愛知県 등 尾張地方에서, 普通名詞, 姓, 地名으로 使用되고 있다. 會意이지만, 字訓도 이용하고 있고, 形聲의이기도 하다(笹原2003).

注 めた 高知県の 小地名에 複數보이는 會意文字이다.

𪛗 たお 中国地方辺의 小地名에 다수보이는 象形文字적인 요소를 포함한 문자이다. 中国에서도 「蓋」의 異体字로서 字書에 실려 있는 있지만, 衝突일 것이다. 日本은 복잡한 지형이 豊富하게 있기 때문에, 이런 語이나 地域文字는 다수 채집하는 것이 가능하다.

𪛗 あけん 滋賀県에 「安原」(あけんばら)라는 小地名이 존재한다. 「あけび」의 轉으로, 熟字訓 「山女」의 合字이다(笹原2006).

次の 集團文字는, 位相文字의 하나이다. 位相은 集團외에 場面을 표시하는 것도 가능하고, 位相文字라고 하면 場面文字도 포함한다.

婦 峠 うばくら 中世 以降의 立山信仰에서 「うば堂(どう)」 「岩くら」 등의 宗教施設이나 土地의 이름에 이용된다. 越中(富山)에 있어서는 宗教이고, 地域文字性도 가지고 있다. 이외에도 修験道、富士講 등 新興宗教에서는 造字가 보이고, 때로는 부적도 만들어졌다.

𪛗 かたな 刀 中世期の 刀工 등 職人集團에 의한 集團文字・場面文字(位相文字・暗号)로, 近世初期까지 이용되고 있었다.

더욱이 이것에는 歴史性, 政治性, 개개의 場面性도 加味할 必要가 있다. 地方的인 日本製漢字가 時代와 함께 일반화, 중앙화하는 것도 있기 때문에, 그러한 歴史的인 변화를 社会, 文化的背景과 함께 「字誌」로서 具體的으로 동시에 立体的으로 기술해 나갈 必要가 있다.

日本人의 말 뿐만이 아니라, 社会(識字層), 文化, 生活이나 意識의 변화에 따라서, 그 위에 「辻」 「柵」 「柵」(樺, もみじ) 「働」 「峠」 「鱈」 「駉」 「秣」 「腺」 「俚」 「榧」(センチメートル) 「火石」(セキ) 「才筆」(むしる) 「施」(トン 重量) 「日玉」(曜) 등 다양한 造字, 기존 漢字에 字体, 用法에 개조를 더한 字가, 때로는 形声文字나 象形文字 등의 方法을 바꿔가면서, 明治大正의 時代까지 행해져 왔다고 보는 것이 가능하다.

柵 「樺」(かば・カ)의 異体字로서 使用頻度가 姓 등의 固有名詞에서 높기 때문에, 人名用漢字에 採用되고, 더욱이 古來의 「もみじ」나, 새로운 훈 「はな」 등도 取訓字로 출현했다.

轉 そり 東北地方의 地名에서 사용되고, PC에서 사용할 수 있는 JIS第2水準 漢字가 되고, 仮名漢字変換이 可能해져, 그것을 이용해 마침내 普通名詞로도 사용되게 되었다. JIS는 使用字種의 制約을 낳는 한편, 범위 내에 들은 기존의 日本製漢字에는 새로운 생명을 불어넣었다고 자리매김하는 것이 가능하다.

エビ라고 읽는 「蛭」는, 원래는 旁이 「耑」이었는데, 時代에 의해 字体의 變化가 인지되고, 東北地方에서 多用되는 등, 지역에 의한 사용도의 차이를 가지고 있다. 그러나 근년, 蛭原友里라는 인기 모델의 姓에 포함 되어있었기 때문에 미디어를 매개로한 사회집단에 의한 인지의 차를 낳았다(笹原2007b, 笹原2007c). 北海道에서는 普通名詞로서 사용되고 있지만, 현지에서도 지역차가 있다고는 전혀 의식되고 있지 않다. 이 사용의 偏在는, 姓이나 地名으로 使用하는 외에, 「蝦夷」에서의 「蝦」字에의 친숙함과 회피에 의한 것일 것이다. 오늘날에도 이러한 움직임은 발생하고 있는 것이고, 과거의 역사만을 고찰하고 있어서는 日本製漢字에 관계된 현상을 상대적으로 이해하는 것이 가능하지 않다.

한편, 한자·日本製漢字의 음훈을 이용한 가차나 자의를 이용한 取音字는, 아이누어에 대해서도 영향을 미치게 되었다. 取音字는, 일본제한자의 새로운 제작이 줄어 든 지금에 이르기까지, 일본인의 감성을 표현하기 위해서 계속 생산되고 있다.

日本製漢字의 다양성을 입체적으로 파악하기 위해서는, 이러한 위상을 다각적으로 예측할 必要가 있다.

2. 造字法에 의한 分類

以上の 역사에 나타난 日本製漢字에는 여기까지 수시로 언급해 온 것과 같이, 形成方法의 패턴을 찾아낼 수 있다. 위에 적은 変容의 動態를 개별 글자의 변화부터 인식하기 위해서는 構造的인 面에 주목하여 검토를 할 必要가 있을 것이다.

그 구조는 造字法으로 해석하는 것이 가능하다. 六書에서는 部首와 義符를 조합하여 만든 會意文字가 압도적으로 많다. 그것은 文字와 言語라는 点에서 보면, 漢語(字音語)가 아닌, 고유어 즉 和語를 訓詁에 의해 표현하려 했기 때문이다. 앞에서 서술한 「鳴」(しぎ)나 「檉」(かし)는, 그 전형이다. 인간의 인지나 심리의 면

에서는, 기존의 한자를 인식하고 있어도, 그것보다 일본인이 이해하기 쉬운 구성요소와 구성법을 선택해 바꾸어 만들었다고도 할 수 있다.

會意만이 아니라, 일찍부터 습字라는 造字法도 생겨있었다. 人名에서 볼 수 있는 「麻呂」는 나라시대에 세로쓰기를 하는 筆者에 의해서 합자화가 시작되고, 1.5자 정도 길이를 가지는 상태를 거쳐, 「鷹」로 一文字화한 것은, 토대가 되는 한자 「磨」 등이 있는 것에 同源의 語를 訓으로 한 「丸」 등으로 부터의 유추도 추가되고, 하나의 개념은 하나의 글자로 쓰고 싶다고 하는 表語文字로서의 요구에 의한 것일 것이다(笹原2006). 「畑」「畠」 등도 같은 형태로 파악하는 것이 가능하다.

日本製漢字에 있어서는, 象形文字의 數가 적다.

㉑ ます 枅・桲(升・舂)는 形声(偏을 付加, 旁에서 訓을 나타냄)에 의한 日本製漢字. 江戸時代부터 記号的인 形態를 가짐.

㉒ トショ(図書) 이것은 図書館学 秋岡梧郎의 造字이고, 「図」(図書館) 등도 만들어졌다. 이것에 視線의 움직임을 더한 「□(□の中にノ ドクショ(読書))」는 指事文字라고 말할 수 있을까.

구성요소에 기존의 한자를 상형적으로 간주하고 轉用한 것은, 오래전부터 몇 가지 볼 수 있다. 部首로 構成된 會意文字로서 취급되는 것이 일반적이다.

𪛗 とも 奈良時代 이전부터 나타난 最古級の 日本製漢字, 旁이 象形的要素라고 한다.

辻 つじ 「十」가 상형적. 漢語의 「十字路」를 바탕으로 만들어진 것이다.

𪛘 まろぶ・すべる 「辻」(おしたつ)도 있어, この「一」는 象形文字 내지 指事文字라고 할 수 있겠다. 이「一」를 「二」「三」「四」「五」「六」「七」「八」「九」로 한 造字도 일찍이 사전류에 수록되어져 있었다.

𪛙 たわ 旁이 山の 鞍部를 나타내고, 美作 주변의 小地名에 보인다. 같은 종류로 奈良에 「迤」, 静岡에 「山乙」 등도 있어, 역시 旁의 「辻」이나 「乙」이 象形이라 파악할 수 있다.

𪛚 するめ 日本製字義이지만, 旁이 象形的要素라고도 한다.

덧붙여, 「魚◎」로 「ちくわ」(竹輪)라고 읽는 것은, 造字와 遊戯字와의 경계가 명확하지 않다. 魚偏이 가장 그럴 듯하고, 楷書的이지 않은 旁에 의해 쉽게 인상에 남는다. 만담가 순후우테이 에이시(春風亭栄枝) 『蜀山人狂歌ばなし』(三一書房1997年 図1) p.122에 나온 것(출처는 不明이지만, 遊戯에 의한 個人文字)이, 文字檢索 소프트웨어 「今昔文字鏡」에 採用되고부터 情報가 흘로서기를 하기 시작하여, WEB사이트나 텔레비전의 방송 프로그램의 퀴즈에 문제로 출제되는 등 순환하고 있다.

鋤	魚◎	鰻
...
こ	こ	こ
れ	れ	れ
は	は	は
手	ち	か
切	く	ま
れ	わ	ぼ
金		こ

<図1> ちくわへの遊戯的な造字。
『蜀山人 狂歌ばなし』

로마자를 漢字와 같은 필법으로 바꿔 붓으로 쓰기 쉽게 바꾼 것도 이것의 일종이라고 말할 수 있다.

ㄴ 오ンス Oz.의 記号로 江戸時代に 蘭學者에 의해 만들어졌다. 또한, 「弗」(ドル)도 그 종류이지만, 日本製字義이다.

□ (氏에서 一을 뺀 형태) ゲレイン 같은 모양, 로마자 「G」에서.

日本에서는, 한자는 상형문자여도, 구성요소의 조합에 따라 字義가 생기는 會意文字와 같은 해석이 유포되는 경향이 있다. 日本人은 文字나 文字에 의한 表記에 好惡의 感情을 포함시키는 세계적으로 보아 드문 심리를 가지고 있다. 선택 가능한 문자·表記体系와 관계된 것이지만, 특히 다음과 같은 의식은 日本製漢字를 좋아하는 의식과 表裏를 이루고 있어, 日本製漢字를 이용해온 심리의 根底를 찾아낼 수 있는 가능성이 있다.

「人이라는 글자는, 두 명의 사람이 서로 지지하고 있는 모습」, 「食이라고 하는 글자는 「사람에게 좋다고 쓴다.」, 「親이라고 하는 글자는 어미 새가 나무 위에서 서서 지켜보고 있다는 등의 이야기가 일반에 유포되어 있다. 姓에서도, 「吉田」氏が 武士가문의 출신이기 때문에 口의 上은 「土」다. 자신의 선조는 농민이었기 때문에 「土」 등, 한자 字体에 대한 통속적인 어원해석을 자주 들을 수 있다. 중국에서도 이러한 분석은 오래전부터 행해졌지만, 그 이상으로 확고하고 강하게 신뢰되어지고 있다. 「吉」에는 음독 「キチ」와 훈독 「よし」로 각각의 字体를 나눠 사용한다고 하는 해석도 퍼지고 있다.

働 はたらく 전술한 대로 武家社会에서 퍼진 것처럼, 「はたらく」라는 訓을 가지고 있는 「動」에, 「うごく」와 구별하기 위하여 部首의 偏을 부가한 字이다(乾2003). 이러한 예는, 形態面에서는 會意文字로 불리지만, 史的인 관점에서는 偏의 부가로 간주하는 것이 가능하다. 이것도 小學校에서 학습한다.

畑 はた 前述한 대로, 中古, 中世期에 日本에서 火田농업의 進展과 함께 나타나고, 퍼졌다. 中国에 있었던 熟語 「火田」에 기초한 合字인가. 나중에 「はたけ」와 섞여, 현재 小學校에서 학습하는 2字중의 1字이다.

込 こむ 現代에서는 新聞 등에서 무엇보다 높은 사용빈도를 보이는 日本製漢字. 「申し込み」 등. 現在, 中學校에서 学習하기 때문에, 明朝体의 영향을 받은 사람이 많다. 教科書体로 습득되는 것이 많은 「入」이란, 오른쪽 획 내림의 始筆位置의 字体에 흔들림이 생긴다. 鎌倉時代에는 「こもる」 등으로 읽혔다. 「込」(まろぶ すべる) 는 전술참조.

峠 とうげ 이 語은, 民俗学등에서, 공납 「手向け」의 転이라 한다. 현재, 이 글자가 좋다고 평하는 사람이 매우 많다. 글자에 이미지를 의탁하여, 好惡의 감정을 포함시키는 것도 일본인에게 顯著한 현상이다. 늦게 나타났다는 「□(糸の右に卡)」(しどろもどろ)에는, 「峠」와 「峠」(こはぜ) 등과 같은 모양의 발상이 엿보인다. 「□(彡의 右에 山과 그 下に卡)」(どんど) は, 福井에서 用水路를 의미하는 方言으로부터 생긴 小地名에서 보인다(笹原2006).

□ (佛を3つ品のように) さかし まこと 이것들은, 昨年、一昨年、二年前 등을 의미한다. 「□(辶に佛)」(こそ たまたま) 「□(辶に法)」(おとし) 「□(辶に僧)」(さおとし)와 함께 中世 字書에 수록되어

저 있지만, 仏教에 관련된 者에 의한 造字일 것이다.

鯉 たら 비유에 의한 「ゆき」라는 女性語에서 생긴 것 일 것이다. 四季、雪月花의 風流 나 島国の 食文化를 反映하고 있다. 특히, 「鯉」 「鯉」(そり)는, 熟字訓 「雪車」 「雪舟」에서 생긴 合字라고 파악할 수 있다.

桜 もみじ 中国製の 漢字에는 「雪」나 「花」를 構成要素로 하는 것은 거의 없다. 日本人이 花鳥風月, 雪月花를 감상하고, 自然의 植物을 존중하는 文芸가 향수되는 중에 생긴 것이어, 日本人의 字라고 말할 수 있다. 다만, 「月」은 造字의 構成要素에 이용되는 경우가 적다. 「權」의 日本製異体字로서 「カ」 「かば」가 사용된다(上述). 특히, 「口花」(カ)는, 「喧嘩」의 2번째 字에 使用된 日本製異体字. 「火事と喧嘩は江戸の華(花)」라는 속담과 그 발상에 공통성이 느껴질 것이다. 「言花」라고 Tm지만, 그 字의 경우는 「やさしい」라고도 사용되었다. 특히, 현재 日本에서는 「優しい」는 「사람을 걱정하다·배려하다」 「배려·걱정하는 사람」이라 俗解되는 것이 많다. 形聲을 會意化해 파악하려 는 것이어서, 日本製漢字에 맡겨진 感性은 계승되어 지고 있다. 近年에는 姓名의 획수로 운세를 점치는 성명점에 의해서 「憂」를 사용하는 케이스도 많아지고 있다. 造字 자체는 文字코드의 影響때문에도 감소하고 있지만, 기존의 漢字字義를 무시하고, 감각적으로 이미지로서 취하는 傾向의 高조가 여기저기에 생기고 있는 것이 주목된다.

麴 こうじ 「麴」를 素材·이미지에 들어맞게 해, 擬양스를 부여한 것이다. 모두 常用漢字表외의 글자이지만, 계속 사용하고 있고, 用法을 세분화하고 있다. 近年, 健康식품으로서 주목받게 되어, 이 日本製漢字도 사용빈도가 다시 높아지고 있다.

鼻 かかあ 熟字訓 「口鼻」 「鼻口」로부터 日本製字義 「口鼻」가 되었다. 그것에는 「嗅」(かぐ)도 영향을 미쳤을 가능성이 있다. 거기에서 부수를 女로 바꾼 江戸時代の 造字이다.

躰 しつけ 日本独自の 生活規範을 나타내는 말에 대응하여 中世에 出現. 그러나. 戦後에 死字化 되고, 개개인에게 取音字(当て読み)로서 「エステ」 「ニクタイビ(肉体美)」 등의 臨時的, 遊戯的으로 읽히게 되는 상황에 이르렀다. 전술한 대로 室町時代에서 江戸時代 즈음에는, 다른 會意에 의한 「身花」 등으로도 기록되었다.

辻 しめ 「メ」(メ)와 同義. 文明本『節用集』에 채록되어, 現在, 壱岐 등의 小地名과 姓, 酒의 상표에 남아 있다(笹原2006). 이 「辻」는 진행한다는 뜻을 나타내는 것일 것이다. 「鮪」는 「鮪」이, 「鮪」는 漢字 「蟹」(蟹(蚤)에 대응한 六朝時代의 異体字)가 힌트가 된 것일 것이다.

蛸 えび 和語의 発想에 따른 熟字訓에 의해 表記 「海老」를 근거로 한 것일 것이다.(상술참조). 近世에는 「蛸」를 파생했다.

權 でーご 木の 名. 沖繩(琉球)의 姓에 일찍이 있었다. 「卒」(ぐし)는, 沖繩의地名과 姓에 「卒宮城」(ぐしみやぐすく・ぐしみやぎ)으로 사용되어져 있지만, 한자의 「隹隹」의 부분이 「双」으로 생략된 것은 아닐까라고도 말해진다.

啖 いかん おとな うば 모두 日本製字義로, 北海道, 佐賀, 山口와 各地에서 小地名에 地域訓으로 出現한다. 대부분 사용되지 않는 漢字와 衝突한 것이다. 會意式的 發想에 의한 것 외, 地名 「姥喰」(おばくら)의 「姥」가 逆行同화를 일으켰다.

風 こがらし 部分的인 形声文字인가. 「風」가 원형이 되어 있지만, 「木嵐」에 기초한 것인가, 「木枯らし」에서는 時代劇 木枯紋次郎의 이미지가 붙는다고 해서 使用하기 꺼려하고, 「風」을 선택해서 이용한다는 사람도 있다. 日本에서는, 文字에 의한 表記感은, 語의 코노테이션과 같이 중시되어져 왔던 것이다. 특히, 「風」(たこ)는 中国系의 熟語 「鳳巾」 「風巾」에서 나온것이라 생각하면 略字化를 포함한 合字가 된다. 漢字에서는 「紙鳶」라고도 쓴다. 關西에서 「いか」, 九州에서 「はた」라는 地域訓으로 읽힌다.

風 ふぶき 連歌作品외에 秋田藩의 文書에 出現하고 있다.

笹 ささ 「竹葉」의 略字를 포함한 合字로부터 인가(上述参照).

形声文字는 本來는 中国語를 표기하기 위한 방법이어서, 單音節의이지 않은 性質을 가진 和語에는 적합하지 않았다.

働 ドウ 원래, 和語 「はたらく」를 「動く」로 表記하며, 「うごく」와 구별하기 위한 造字였지만(乾2003), 뒤에 類推에 의해 음독이 생겼다. 「労働」 「実働」 등의 日本製熟語(和製漢語)에 있어 ドウ는 慣用音으로 位置되었다.

鉾 ビョウ 漢語起源으로 생각되는 武器 등의 部品때문에 近世에 생긴 것이다.

腺 セン 蘭學者 宇田川榛齋에 의한 訳語를 위한 造字였다. 江戸時代に 醫師의 集団文字가 되어, 明治期에는 一般化가 進행됐다. 2010년에 常用漢字表에 採用되고, 결국 共通文字가 되었다. 個人文字의 段階에서는 漢方医 등 라이벌들의 造字와 競合하고, 書籍등을 통해서 결과적으로 확산된 것이다(笹原2007a)⁴⁾.

澀 ボク 墨 隅田川(墨田川)를 위해서만 만들어진 造字(笹原2007a). 기존의 「墨水」 등의 「墨」에 대응한 偏의 付加이다. 雅를 목표로 한 造字이지만, 中国에서의 「漢」 「湘」 등의 三水의 形声文字라는 川의 名의 전통에 준거한다. 이 雅를 字에 요구하는 意識에도 日本人의 漢字에의 이미지 중시자세가 보일 것이다. 林述齋가 造字한 個人文字로부터 발생하여, 明治 初期의 成島柳北로부터 昭和의 滝田ゆう에 이르기까지 江戸情緒, 下町の 雰囲氣를 繼承해 온 글자였다. 三水의 日本製漢字는 서민들 사이에서는 얼마 되지 않는다.

鯉 키す 魚名의 頭音を 旁에서 表現한 것이다. 日本製漢字에서는 이러한 魚偏의 造字가 많게는 數百種이 넘고, 木偏 다음으로 많다고 판단되어진다(菅原1990에도 그 경향이 나타나 있다). 키ス라는 魚의 입이 튀어져 나와 있기 때문에 英語의 kiss에 의한 造字라는 견해도 있지만, 이 外来語의 전래가 江

4) 笹原宏之, 『国字の位相と展開』, 東京: 三省堂, 2007a, pp.611~694に字誌가 기록되어 있다.

江戸時代라는 것과 맞지 않기 때문에, 俗解에 지나지 않는다. 이 키스는 和語이다.

鰻 鰻 ふぐ 和語의 フグ에 해당하는 것은 日本製字義이다. 漢字에서는 「鰻」「魚屯」「河豚」 등으로表記된다. 2번째 字는 同音・類音의 福(ふく)로부터 연상된 것이라고도 판단할 수 있다. 「魚豕」는 日本製漢字. 江戸時代에는 書簡에 기록된 「鰻」을 漢字義 「あわび」, 日本製字義 「ふぐ」로 漢方医와 환자가 서로 오해해서 死亡事故도 일어났다고 여겨진다(滝沢馬琴『燕石雜志』 등).

広 コウ・ひろい 上述한 대로 漢字 「廣」의 日本製異体字이다. 이 音義를 가진 字는 「宏」「弘」 등 「ム」를 포함하기 위해, 類推되어 만들어졌다고 생각되고 있다. 「職」의 略字에도 「耳云」(漢字와 衝突한다) 외에 「耳ム」가 있다. 中国의 「又」보다도 日本에서는 「轉」을 포함, 이 形이 略字에는 선호되었다. 日本製異体字이다. 中国由來의 「仏」(佛)의 영향도 있는 것인가.

褌 つま 和服(着物)의 部分 「つま」이고, 旁이 혼독을 나타낸다. 形成의 方法에 의해, 和語의 全形을表記하는 方法이다.

峠 かみしも 「上下」 > 「ネ上ネ下」가 거듭 「峠」의 先例에 입각하여 合字化한 것이라는 것이 이미 알려져 있다.

甌 もと 会意形声式이라 말할 수 있다. 日本酒의 酒母의 뜻이 있고, 江戸時代には 旁가 「胎」라고도 쓰여졌다. 이와 같은 조그만 물건에도 筆記할 必要性이 있으면 命名과 造字가 행해졌다.

和 なぎ 「なぎ」라는 訓을 이미 가지고 있었던 「和」에 偏을 부가한 것으로, 同訓의 「風」도 異系統의 日本製漢字이다. 「木和」도 「なぎ」로 읽지만 木의 이름이고, 中世의 真名本에 出現한다. 「那木」의 合字로서의 「棚」(日本製字義)나 「榎」(日本製漢字)와도 관련된 것일 것이다.

枳 とち 十(と)×千(ち)=万이라는 발상에 의한 것이라고 판단되어지고, 平安時代부터 鎌倉時代 初期에 걸친 造字이다(後述).

俵 くるま 「車」에 偏의 付加에 의한 字義區別이 나타난 것이고(前述), 음독으로 シャ(俵夫 シャフ)・ジンリキシヤ(人力車)라고 읽는 일이 있다.

団 「図書館」의 略字로, 筆記經濟에 따라 카타카나를 포함한 合字的인 集團文字이다(上述). 「團」는 中国製이다(笹原2007a).

廊 慶應(義塾大学)에서 생긴 「廊廊」의 合字化이다. 로마자를 声符처럼 사용한 것이어서 遊戲的이지만, 筆記經濟에 잘 들어맞아, 1930年代부터 存在가 確認되고 있다.

上記의 造字法이 複合한 日本製漢字도 존재하고 있다.

秆 킬로미터 「米」는 원래 「米突」라는 音訳이고, 「メートル」의 頭音を 표시함(점차로 意味도 나타내게 됨). 이것들은 会意와 形声이라 할 수 있는 可能性이 있다. 이것들은 幕末부터 있었다고 여겨지는 경우가 있지만, 실제로는 幕末의 音訳을 근거로 해서, 明治期에 中央气象台가 공간을 절약하기 위해 만들어진 것이었다(笹原2007a). 「糶」(센치미터) 「耗」(밀리미터)도 지금도 가끔씩 사용되어지고 있다.

𪛗 킬로그램 위와 같다. 「瓦」에서 그램을 나타내는 계통도 音義+義로 構成되어있다. 「𪛗」(밀리그램)은 이전에는 이용되었다.

𪛗 헥토리터 「立」으로 리터를 표현함.

𪛗 톤·그램톤 「瓦」가 「瓦蘭馬」로 ガランマ의 音訳라는 表音에서 비롯된 것이지만, 그곳에서 造字가 생기어, 形声文字처럼 「トン」이라고만 읽는 것처럼 되었기 때문에 表意文字的인 要素처럼 되었다. グラムトン이라 읽는 경우도 있고, 그곳에서는 재차 表音으로 변한 것이라고 할 수 있다. 현재에도 東京모노레일 車内 등에서 보이는 것이지만, 常用漢字表에서 제외되어 있고, 톤을 表記하는 문자로서는 「屯」「t」가 주류가 되었다. 다른 미터법의 단위도 같은 상황이어서 「米」「立」 외에는 片仮名表記나 「m」「l(筆記体)」「km」「mg」 등 기호표기로 되어 있다.

熟字訓(숙어훈)을 동반한 기존의 漢字列를 조합시킨 合字로서는, 「畠」「畑」가 대표적이지만, 그것은 전에 「白田」「火田」으로 「はたけ」「はた」가 熟字訓으로서 존재, 정착해 있었다는 것이 조건이 된다. 지금까지도, 合字에 該当할 수 있는 예를 보여줘 왔지만, 下記는 순수한 合字이다.

磨 麻呂 一語는 一字로 表記하려는 中国漢字에서 비롯된 의식에 의한 것일 것이라. 筆字에서 縦書된 것도 合字化를 促進시켰다. 「磨」가 본바탕이라. 이 「まろ」는 まる(糞의 뜻)이나 丸의 意으로 여겨진다. 人名 등에 이용된다.

条 久米 「横条」「条子」등 姓名에 사용되었다. 「斎」의 異体字 「条」의 存在가 바탕이 된 것일 것이다.

𪛗 刀(かたな)를 표현하기 위하여 戦国時代に 있어서의 刀工이나 鑑定師 사이의 集团文字(他集团으로의 비밀유출을 막기 위해서인 경우에는 場面性도 수반한다. 前述参照).

漢字가 形態面에서 변화를 초래했기 때문에, 日本製漢字로 파악되어온 경우도 적지 않다.

靄 雲 おかみ・め 모두 靈(靈)의 巫를 意図적으로 置換했다고 생각되어지는 日本製字義로, 『日本書紀』등 上代の 文献 등에 이용되어졌다. 모두 和語를 표현하기 위한 것이고, 字音 リョウ・レイ를 喪失했다.

𪛗 とち 日本製漢字的 「𪛗」(十と×千ち=万)과, 漢字的 「𪛗」(レイ)가 합쳐져 생겼다고 吉田東伍『大日本地名辞書』외에, 三矢1932, 中田1982 등에 의해 판단되어진 日本製漢字이다. 明治의 廢藩置縣에서 𪛗木県가 만들어진 시기부터 多用되게 되었다. 「婦𪛗」로, 類推로부터 キレイ라고 읽는 종류는 地域音으로 分類가 가능하다.

攀 たすき 会意에 의한 日本製漢字로 여겨져 왔지만, 漢字 「攀」가 平安時代에는 日本에서 会意化를 일으켜 이와 같이 변해있고, 자음 ハンを 喪失한 것으로 보여진다.

勻 におい・におう 漢字 「勻」(韵)의 변형이다(上述参照). 字音 イン을 喪失, 聴覚・視覚的인 意味를 삭제하여, 후각이 中心的인 意味가 되어간다.

𪛗 わく 漢字 「木卒」가 생략된 것으로, 江戸時代의 集团文字에서 비롯되었다. 常用漢字表에서는 訓読으로

로 s로 다루어지고 있지만, ワク는 字音語이다.

蝸 だに 会意에 의한 日本製漢字로 여겨져왔지만, 漢字「蝸」에서 變化한 것으로 字音은 ギ에서 マン으로 變化하고, 후에 喪失했다(中国でman3가 된다. 笹原2007a).

筆 むしる 漢字「笔」에서 變化한 것은 아닐까. 후에 부수가 추가되어, 「才劣」「才筆」라고도 쓰였다.

𪛗 しめ 中国의 龜甲의 卦爻를 나타내는 象形文字「卜」(占)을 日本에서「しめ」로 사용한 것부터 일 것이다.(中世以前の 確実한 用例는 보이지 않는다).「貫」의 略字나 봉투를 봉한자리로서의 使用은 별도의 계통으로 생각할 필요가 있다. 특히, 반복해서 사용되는「々」는, 中国産의 反復記号「=」가 日本에서 變形한 日本製符号이다.「一ヶ月」등에 이용된「ヶ」는, 漢字「个」에서 생겨난 日本製異体字이다.

𪛗 もんめ 근세 이래「文メ」合字說도 있었지만, 俗解이다. 字義와 文献에서 입증되는「錢・泉」由来說보다도 그럴듯한 것으로 인식되어, 流布했다(笹原2007a).

旗 はた・キ 辞書에서는 日本製漢字로 여겨지는 것이 많지만,「旗」이 字源俗解, 잘못된 楷書로의 回歸에 의해, 종종 途中段階를 거쳐 발생한 것이다. 결과적으로는 部首의 付加로 되어있다. 中国에서도 일직이 같은 모양의 字体가 사용되어지고 있어, 暗合을 일으키고 있었다.「靄」「靄」도「鶴」의 흘려 쓴 글자를 매개로 점차 變化한 것으로 姓名등에 남아있다(笹原2007a).

様 敬称의「様」(さま) 대해서, 近世에 편지 등에서 아랫사람에게의 주소 성명에 대우待遇表現으로 사용된 것으로, 日本製字義에 정착한 異体字였다. 이외에도「水」의 部分을「次」로 바뀌서「次様」로 불리우는 字体 등도 이용되었다. 現在 이것이 常用漢字表에서 新字体로 된 것은, 社会制度가 變化한 것을 반영하고 있다. 伝統芸能인 三味線の 世界에서는 비슷한 케이스가 남아있어, 그 격에 의해「澤」의 초서,「沢」(しゃくざわ)라고 격하되어 간다. 자체에 正式 획수가 많은 만큼 敬意가 표출된다는 意識에 의한 사용이다.

齋 姓에서 齋藤 등의「齋」는,「示」부분의「丨」까지만에 쓰지 않는 것으로,「ノ」까지 쓰는 것 등도 있어, 日本製異体字도 다수 존재한다.「齋」와의 뒤섞임 외에도 과거 筆記者의 쓰는 버릇, 本家和 分家の 區別을 위해서라고 판단되고, 細分化한 字体에 대한 意義부기도 확인가능하다.「□(文의 下에 二)」처럼, 文武의 武를 첫번째로 하고, 文은 두번째로 했기 때문이라고 말해져서 전해지는 케이스도 있다. 固有名詞, 그 중에서도 姓名에는 이런 조건이 字体에 影響을 주는 케이스가, 지금도 여전히 新句로 발생하는 경우가 있어, 固有名詞의 漢字에 남아있는 특수한 우리물건으로서 意識이 주목받는다.

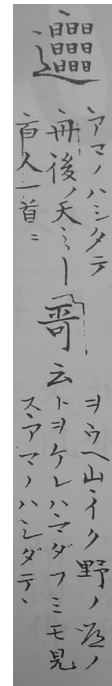
𪛗 「死る」(たひる)는 近年에 생긴「死ぬ」의 集團語이고, 인터넷을 통해 보급됐다.「死ぬ」가 사이트상에서 금지어가 되었기 때문에, 그것을 회피하거나 완곡하게 표현하려는 의도가 있었다. 또「死」에서「一」을 긋는 것으로, 죽을 것 같지만, 죽지는 않았다는 것을 表現하려했을 가능성도 있다. 컴퓨터의 문자코드의 제약중에서 이러한 새로운 표현으로 變化해온 것이 엿보인다.

□ (本을 품처럼 3개) 近年,「本の森」의「森」에 이용되는 등, 固有名詞나 로고마크로서 많은 책을 含意

해서 사용되는 경우가 있다. 더욱이 「森」은 象形文字에 의한 단순한 구성이기 때문에, 영감으로 연결되기 쉽다. 이것을 木가 많다는 形容詞가 아닌, 명사 「もり」로서 사용하는 것은 日本製字義이다. 어떤 일본인은 대체로 이 漢字의 구성에 의해서, 「森」은 林보다도 木가 많고, 밀집해 있다」라는 이미지를 가지고 있다. 「社」의 部首를 木偏으로 바꾼 「杜」(もり)는 日本製字義이고, 奈良, 平安時代부터 이용되고 있다. 「杜絶」의 熟語나 「杜甫」의 이름을 모른채로, 또는 意識하지 않고 만들었을 가능성은 낮을 것이다. 이들 識字者가 意識하면서도, 굳이 字義를 씌워서 만든 것으로 판단되어진다.

- (木土水를 품처럼) もり 森는 實際로는 「木」만으로 이루어진 것이 아니기에 한자가 이미지를 좁게 만든다하여, 近年에 만들어진 글자이다. 漢字는 이미지를 부풀리는 文字로 불리우지만, 實際로는 이러한 반작용적인 현상도 일으킨다. 이것은 상당히 많은 공감을 받아, 어느 정도 일정한 확산을 보여주고 있다. 다만 여기에도 「虫」나 「鳥」 등은 버려졌다.

더욱이, 明治初期에서 現代에 이르기까지, 造字를 모집하는 콩쿠르가 수시로 개최되어져 왔지만, 一般에게 남은 造字는 전술한 「傳」 정도 밖에 없고, 특히 읽기에 관용구나 성구처럼 긴 것은 現實의社會에서는 거의 사용되는 것이 없다.



<図 2> アマノハシタテへの造字
『運歩色葉集』

마지막으로, 造字의 의도가 판독하기가 어렵고, 造字方法이 불명확한 것도 남아있다. 관련된 用例나 発言의 採集과 蓄積이 不可欠하다.

- (旦の日が日日日3段に)・□(厂에 有有有2段)(あまの)はしだて
이것은 中世期の 『運歩色葉集』(天正15年本 古辞書研究資料叢刊 図2) 등에 출현하고, 連歌辞書인 『詞林三知抄』 등에도 유사한 글자가 보이지만, 당시 「あまのいわ(は) ぐら」라는, 「□(岩 3개의 下에 石 3개로 그 下에 聞)」이라는 も 国語辞書인 天正18年本 『節用集』에 출현하고 있어, 관련됐을 가능성이 있다.
- 榎 近年、人名에 사용하고 싶다는 要望이 있었다. 음독은 알 수 없지만, 品이 어떤 아이를 기르고 싶다는 기원을 담은 글자라고도 생각되어진다.

3. 出自 認定에 즈음하여 注意를 要하는 事項

이외에도 下記와 같은 케이스도 존재하고 있기 때문에 한자인지 日本製漢字인지의 판단에는 충분한 주의가 필요하다. 漢和辭典 등도, 研究成果를 충분히 거두어 들이려는 자세가 요구된다.

中国製이지만, 日本 등 주로 外国의 기록에 남아있는 글자를 유사한 서적에 비유해서 「佚存文字」라고 부른다. 山田1987도 이러한 字에 대한 考證의 必要性을 주장하였다. 필자도 시도해 본적이 있지만(笹原2007a 参照), 한마디 말마다 어원이 짜여져온 것처럼, 한글자마다 자원, 하나의 표기마다에 표기의 유래가 짜여지고, 축적되어져 갈 필요가 있다.

蠅 仏典에 있는 「蛛」의 異体字(笹原2007a). 「魴」에 대하여 「𩺰由」도, 仏典에 있는 異体字였다(『随函録』). 「𩺰」로 「菩薩」을 표현하는 略記도 唐代의 仏典에 다수 보이는 略合字가 日本에서 아직까지 계승되고 있는 케이스 이다.

𩺰 仏典에 있는 「𩺰」의 異体字로 素材에 입각하여 부수를 개정한 것 일 것이다. 『日本書紀』 α 群이라는 中国系の 筆錄者에 의해 기록되어 졌다고 여겨지는 부분에 나오는 유일한 「日本製漢字」로 주목 받은 것이지만, 역시 『随函録』에 있기 때문에 漢字였다는 것이 밝혀졌다.

□ (儻의 国은 國) 「佛」의 中国製 異体字이다. 日本人이 會意文字를 선호하는 傾向과 합치, 日本에서 江戸時代부터 多用되었다. 唐代의 則天文字도 東アジア에서 한시기 周圍의 分布를 나타냈지만, 그중에서도 「圀」(國・国) 등은 日本에서 오래 선호되어오고 있어, 현재에도 인명 등에서 볼 수 있다

茸 キノコの 意는 国訓이라 여겨져 왔지만, 平安時代의 『和名抄』가 漢籍 『崔禹食經』에서 가져온 용법이다. 鮎貝1972에 「漢字にもあれど意義全く異り」⁵⁾ 등도 있는 것처럼, タケ의 意마저 가진 「耳」에의 草冠의 付加는 우선 고대 중국에서 발생하여, 그것이 한국을 거쳐(金1983), 일본에 들어온 것 이리라.

畠 이것도 古代에 中国이나 韓国에서의 熟語 「白田」의 使用을 받아서, 日本에서 만들어진 것일 것이다(上述参照).

閑 中国의 『龍龕手鏡』에 「ㄱ勞」로서의 字体와, 仙台의 地名 「ゆり」 등과는 衝突에 지나지 않는다. 近世의 仙台에서는 이외에도 「𩺰」(たばこ)도 中国의 別系統의 같은 字体와 衝突을 초래하고 있다.

上記와 같이 日本에서 태어난 字義에는 어떤 字体에 漢字義를 인지한 위에서 발생한 것으로, 그 존재를 모른채 발생시킨 것이 있다. 그 모두가 日本製字義가 되지만, 前者에는 字義가 日本에서 변화된 것도 포함되어 있다.

5) 鮎貝房之進, 『俗字攷』, 国書刊行会, 1931, 1972復刻, pp.98; 金鍾埴, 『韓國固有漢字研究』, 集文堂, 1983, pp.44 & 193参照.

□ 字音

和 日本에서 字音「ワ」의 通用에 의해 「倭」에의 취음자(当て字)였다. 이미지를 변화시켰다. 字音에 있어 日本製字義에는 「国訓」이라는 術語가 이용되고 있지만, 「훈독」과 혼동되기 쉽상이다. 「大和」는 「やまと」에 해당하지만, 이 和語는 원래는 山処라는 의미라고 생각할 수 있다.

的 「組織的」 등의 「的」(テキ)은 明治初期에 英語接尾辞「-tic」에 대응하여, 中国白話의 「的」(의)를 대응하는 遊戯性있는 취음자에서 기원하는 것이 同時代의 大槻文彦의 記録에 의해서 알려져 있다.

乳 1980년에 뉴질랜드의 略称(ニュウ)으로서, 이 字가 일시적으로 채용되었다. 典拠가 있는 「新」도 안에는 있었지만, 싱가포르와 충돌해 버렸다. 당시에는 大使館에서 한 공모에서 최다득표여서 어쩔수 없다고 생각되었지만, 뉴질랜드로부터 畜産物 輸出国으로서의 이미지에 맞지 않는다고 각하되었다. 현재 「NZ」이지만, 이것은 「日NZ關係」 등이라고는 사용하지 않는다.

腥 部首는 月가 아닌 肉月이고, 비린내나다(なまぐさい)·돼지의 霜降肉이라는 뜻이지만, 글자의 표면적인 의미와 字源을 통속적으로 해석하여 「月」과 「星」을 묘사했다. 別個 會意文字로 진단하는 사람이 많다(笹原2006). 좋은 이미지를 불러와 セイ라고 읽히는 人名으로 新生児에게 使用하고 싶다는 要望이 여러 번 있었다. WEB상에서의 별명으로 이미 사용되고 있다. 배경에는 글자 획수점에 의한 命名의 유행과 漢字를 画面上에서 보는 것이 늘어난 것에 의한 이미지화 등을 들 수 있다. 이것은 손글씨를 쓰는 기회가 감소해, 日本製漢字가 새로 산출되는 것이 어렵게된 반면, 기존의 글자에 대해서는 같은 모양의 착상이 더해질 수 있다라는 새로운 국면을 반영하고 있다고 볼 수 있다.

□ 字音と字訓

粹 이 글자는 江戸時代에는 「いき」(東日本), 「スイ」(西日本)이라고 지역에 따라 읽는 법과 의미의 차이를 가지고 있었다. 다른 것이 섞여 있지 않은 字義에서, 江戸, 上方의 都會的, 세련된 美意識을 나타내게 되었다. 더욱이, 「侘」「寂」이나, 熟語의 「幽玄」 등도 日本的인 독특한 美意識을 표현하는 語義로 변화한 것이다.

竜 訓과 音으로 「たつ・リュウ」라고 읽지만, 字体의 印象에서는, 近年에는 西洋의 드래곤이라는 이미지가 높아져 있어, 實際로 「龍」을 中国 등 東洋의 용으로 구별하는 의식이 청년층을 대상으로 한 소설이나 게임 등에서 퍼져있다. 이 글자는 「たつ」, 「龍」은 「リュウ」라는 의식도 특정 속어 등으로부터 생기고 있다. 「ドラゴン」이라는 음독을 부여하는 케이스까지 나타나고 있다.

曖 이것을 人偏으로 한 것과 합쳐서, 「アイ」「ほのか」라고 읽는다. 마찬가지로 新生児에게 사용하고 싶다는 要望이 複数있었다. 「ほのか」에는 「仄」「佛」「穂乃香」 등도 있지만, 이 글자의 ‘명하니 있다’라는 字義는 意識에 떠오르지 않고, 글자의 표면적인 이미지가 일부에서 선호되어져 왔다. 日偏 쪽의 글자는 熟語로 「曖昧」로서 使用頻度数도 높았기 때문에, 2004년에 人名用漢字에 採用되기에 이르렀다(現在는 常用漢字). 命名權이나 表現의 自由도 있지만, 無防備한 아이를 자기의 표현을 위해 미디

어로 취급하는 것에 대한 是非가 문제시 된다.

- 因 圀「大」「幸」의 대신으로, 「因好き」「圀せ」등도 본래의 자의를 생각하지 않고, 女子中高生 사이에서 手記, 電子機器를 불문하고 이용되어지고 있다. 「國」등의 한자부수 口이 단순한 장식으로 변하고 있다. 「因囚」에서 「大人」과 같이도 이용되고 있고, 사용에 관해서는 音訓意識이 보여지지 않는다.

□ 字訓

- 極 江戸時代부터 「きわめる・きわまる」라는 字訓이 변화해, 「きめる・きまる」로도 이용하게 되었다. 이것들의 음독은 集團文字化해, 駐車場 등에서 「月決め」를 지금도 「月極」로 표기하는 업계가 있다.
- 鮎 和食의 「すし」 해당하지만, 奈良時代に 「鮎」와 함께 발효시를 지칭하는 것으로서 사용되어지고 있었다는 것을 木簡에서 살필 수 있다. 그곳으로부터 近世 江戸에서의 스시의 용성을 거쳐, 江戸前ずしの表記로서 정착한 것이다.
- 混 明治以降, 「混(こ)む」가 「込む」의 意味・表記의 領域까지 들어갔다. 「混雑」과 뒤섞여, 새로운 語源意識, 俗解가 정착된 결과, 明治期에 사용되기 시작하여, 개정된 常用漢字表에 결국 채용되었다(笹原 2010).
- 絆 「きずな」라고 읽고, 2011年の 키워드가 되었다(新語・流行語大賞이나 올해의 漢字등에 선발되었다). 이전의 속박이란 字義, 語義로부터, 사람과 사람의 더할 나위 없이 소중한 연결이라는 플러스의 意味로 바뀌었지만, 아직 漢和辭典에서는 거의 대응이 이루어지지 않았다,

□ 읽기가 없는 記号的인 用法

- 彡 サン이라 읽는 漢字이지만, JIS第2水準에 채용되어있기 때문에, PC나 휴대전화 등에서, 「☆彡」로 이용되어 용성을 나타낸다, 이른바 이모티콘으로 사용되고 있다. 携帯電話 등에 탑재되어져 있는 그림 문자는, 다시금 이 應用으로 자리매김 하는 것도 가능하고, 일종의 象形文字등으로서 漢字 등을 대신하여 이용되어지는 것까지 생기고 있다. 日本에서는 電化製品の「切」, 탱크로리 자동차등의「危」, 雑誌의「短丈」, 요금표 등의「小人」등, 漢字 읽기보다도 의미를 전달하려고 하는 表意用法이 존재하고 있어, 그런 읽기와 괴리된 문자사용방법이 그다지 저항없이 받아들여지는 경향이 지적 가능하다.

別個로 제작한 字가, 字体・用法이 일치하지 않는 현상을 衝突이라 부른다. 이것은 日本製인가 아닌가를 판단할 때에는 중요한 개념이 된다.

- 埜 「ぬた」(湿地)는 山梨의 地名에 보이는 地域文字이다. 中国에서는 dai4로 耕地로서 사용되어지는 地域文字이고, 韓國製漢字로서는 dae(敷地) 등도 衝突을 일으킨다.

한편, 暗合은 別個로 만든 字가 字体・用法 모두 일치하는 현상이다.

- 珈琲 coffee コーヒー 「口加口非」라는 表記가 주류인 중국에서는, 玉偏의 이2字에 의한 표기가 이전부터

있었다고 해도 적고, 伝承, 使用이 이루어지지 않았다.(笹原2006)⁶⁾. 더러는 日中에서 暗습도 생긴 것 일까. 日本에서는 이 漢字表記는 江戸時代 이래로 보이고, 거기에 一種의 表現效果가 인정되어 찻집이나 商品 등에 사용되는 경우가 있어, 카타카나나 히라카나에 의한 표기보다도 高級感, 本格感 등을 意識하는 사람들이 많다. 이런 意識과 表記와의 先後關係의 解明이 요구된다.

한자권에서 글자의 相互傳播 結果, 出自의 認定에 問題가 생기는 일이 있다.

串 대부분의 辞書 등에서 「くし」는 日本製字義로 여겨져왔지만, 歴代 漢字圈의 文献을 통해서 檢討한 결과, 中国의 「串」(くし)가 中国인지, 韓国인지, 日本에서 이 모양으로 한 것인지를 다시금 어렵잡아 볼 필요가 있다고 판단되기에 이르렀다.(笹原2012). 「鮑」「蛸」를 「あわび」라고 하는 것도 古代文献이 없어져, 考証이 어렵다(笹原2012). 前者에 「あわび」의 字義가 생긴 것은 日本인지 韓国인지 中国인지, 後者도 字自体가 생긴 것이 日本인지 韓国인지, 文献에 의한 충분한 검토가 필요하다.

黐 음독은 「キ」로, 라는 名称도 있다. 日韓 모두다 日本製漢字, 韓国製漢字하고 인정하는 케이스가 있지만, 원래는 清代 즈음에 中国에서 전파된 문양이었다.

釦 button 옷의 단추(江戸時代에는 포르투갈語由來) 로서의 字義는, 明清期の 中国에서 기인한 것일 것이다. 日本에서는 스위치의 의미로서도 사용되어지고 있지만, 일반적으로 읽을 수 없게 되어지고 있다.

出自는 명백하지만, 그 용법에 새로운 전개가 다른 나라에서 생긴 케이스도 확인된다.

駮 日本製漢字에서는 「しつけ」이지만, 현재 韓국의 人名에서도 mi라는 발음으로 사용되어지고 있고, 大法院도 사용을 허용하고 있다.

辻 日本製漢字로 「つじ」라고 읽는 이 글자는, 姓으로서 특히 西日本에서 多用되고 있어, 韓国에 그대로 歸化해서 sib이라 발음되고 있는 케이스가 있다.

彌 草(くさ) 彌(なぎ) の2번째 字는 日本製漢字, 근거는 不明이지만, 韓国에서는 nan이라고 발음되는 일이 있다. 秋田県 発祥의 姓으로, 그 고장에서는 平安時代 이래의 긴 역사를 가졌다는 전승이 있다. 「辻」「畑」「畠山」「蛸原」「笹原」 등은 中国, 韓국의 書誌情報등에서의 発音を 어떻게 되는가, 國際化社會와 情報化社會의 가운데에서, 解決이 요구되는 문제이다.

出自에 관한 判定은, 慎重하게 행할 필요가 있다. 예를 들어 歴史가 얼마되지 않은 글자여도 마찬가지이다. 예를 들어 下記의 單位를 표현하는 略記를 위한 글자는 出自에 관련해서 여러 종류의 구분이 행하여져 왔지만, 中日韓의 어느 쪽이 먼저 造字, 字訓의 추가를 한 것인가, 近代의 각 분야에 있어서의 文献에 의한 조사가 더욱 필요하다.

噸	ton	トン	呎	feet	フィート
吋	inch	インチ	哩	mile	マイル

6) 笹原宏之, 『日本の漢字』, 東京: 岩波書店, 2006, pp.199に最古例の写真が掲載されている.

IV. 결 론

日本에서는 古代로부터의 書籍외에, 文書, 金石文, 木簡 등이 대량으로 現存, 伝存하고 있다. 그 중에는 여기까지 적었던 대로, 時代마다 日本語를 그 자리마다 가장 잘 어울리게 표기하려고 노력하는 사람들에 의해, 會意를 중심으로 한 造字法에 기초한, 새로운 造字와 그것에 준한 字体, 字義, 字音에 대한 改造가 이루어지고, 또 그것들의 선택에 의한 廢絶과 継続적인 使用이 이루어져 왔다.

그 때문에 지금 아직 文献의 母集團이 確定하지 않고, 日本製漢字의 總體는 調査를 進行시키는 것에 千이라는 단위로 증가하고 있는 실정이다. 그러한 속에서도 구체적인 예에서는 일본의 독자적인 事物이나 概念·語의 造字, 「雪」「花」「風」 등의 要素選択에는 다른 나라에서는 보이지 않는 情感이 반영해있는 것도 살펴 볼 수 있었다. 時代에 따라 日本製漢字를 지지하는 使用者層은 확대되고, 近代에 이르기까지 細分化도 進行되었던 것도 그 다양성에 복잡한 상황을 낳은 하나의 요인이 되었던 것이다.

各種 調査研究의 蓄積을 통해서, 「腺」과 같은, 個人이 만들어, 혼자만의 사용을 거쳐 集團文字가 되고, 결국에 共通의 文字가 된 것이 해명된 케이스도 있다. 이 글자는 中国이나 韓國에서도 使用되어, 지금까지도 특히 中国에서는 常用文字가 되어있다. 本稿에서 나타내보였던 造字法이나 使用者層 등의 틀을 이용해서, 文献 등 객관성이 높은 資料를 넓게 활용하는 것에서 그 복잡하고 다양한 動態를 背景으로 한 社會와 文化狀況과 합쳐서 규명하고, 漢字圈에 있어서 문자의 共通性, 그리고 다양한 交流의 歷史에 의한 相互간의 影響關係, 더욱이 各国文字의 獨自性 確認을, 各国에서 協力해서 실행해갈 필요가 있다고 판단되어 진다.

〈参考文献〉

- 金 鍾埴, 『韓國固有漢字研究』, 集文堂, 1983.
 中田祝夫, 「日本の漢字」, 『日本語の世界』 4, 東京: 中央公論社, 1982.
 三矢重松, 『国語の新研究』, 東京: 中文館書店, 1932.
 笹原宏之, 「日本製漢字の地域分布」, 『日語日文学研究』 46, 2003.
 _____, 『日本の漢字』, 東京: 岩波書店, 2006.
 _____, 『国字の位相と展開』, 東京: 三省堂, 2007a.
 _____, 「日本製漢字「虵」の出現とその背景」, 『訓点語と訓点資料』 118, 2007b.
 _____, 「「虵」の使用分布の地域差とその背景」, 『国語文字史の研究』 10, 大阪: 和泉書院, 2007c.
 _____, 「改定常用漢字表と日本語表記」, 『日本語学』 29-10, 明治書院, 2010.
 _____, 『当て字・当て読み 漢字表現辞典』, 東京: 三省堂, 2010b.
 _____, 「異体字・国字の出自と資料」, 『「字体規範と異体の歴史」 国際シンポジウム』, 東京外国語大学,

2011. 12.18.

_____, 「クシを意味する「串」の来歴」, 『第三屆漢字與漢字教育國際研討會』, 北京師範大学, 2012.8.18.

佐藤 稔, 「擬製漢字(国字) 小論」, 『国語と国文学』 76-5, 1999.

菅原義三, 『国字の字典』, 東京: 東京堂 1990.

鮎貝房之進, 『俗字攷』, 東京: 国書刊行会, 1931, 1972復刻.

山田俊雄, 「いはゆる国字の一つについての疑ひ」, 『成城文芸』 120, 1987.

山下真理, 「「広」の字体について: - 略字体の出現時期とその要因 -」

(http://www.kanken.or.jp/incentive_award/pdf/22/yamashita.pdf 2010 日本漢字能力検定協会
2012/08/23確認).

山下真里, 「異体字が広まる一過程: 「鉋」という字体を一例に一」, 『訓点語と訓点資料』 128, 2012.

乾 善彦, 『漢字による日本語書記の史的研究』, 東京: 塙書房, 2003.

エツコ・オバタ・ライマン, 『日本人の作った漢字』, 東京: 南雲堂, 1990.

謝辞

本稿は、檀国大学校東洋学研究所「東アジアの辞典学(Ⅲ) 東アジア固有漢字の国際標準化と辞典編纂」(2012, 2.10) において発表した原稿に基づくものである。席上、ご教示下さった先生方、有益なご指摘を下さった本誌査読委員の先生方に深く御礼申し上げる。

History and structure of Japanese-made Chinese characters

SASAHARA, Hiroyuki

Chinese characters, Japanese-made Chinese characters, Korea-made Chinese characters, liushu,
Philology